

短歌

2010 2

十首詠競詠

昭和三十一年一月十五日
平成二十二年一月十五日
第二種郵便物認可
発行 印刷

短歌

第八十八卷
第二号
每月一回発行



短歌

第88巻 第2号

2010.2

通巻 1017号

<http://www.tanka.org>

二月のうた

またの日といふはあらずもきさらぎは
塩ふるほどの光を撒きて

春日井建『白雨』

もくじ

十首詠 I	大塚寅彦ほか	01
時評	職場詠とは何か 菊池 裕	21
作品	山本かずゑほか	22
作品 II	間宮佐和子ほか	25
作品 III	安井恭子ほか	29
前月歌評	I 紀水章生	38
	II 村井佐枝子	39
	III 大澤澄子	40
	IV 長谷川径子	41
(窓)	個への回帰 川田 茂	42
私の一首	生のうた死のうた 石井美雄	43
	鷺沢朱理	44
近刊歌集渉猟	藤原龍一郎歌集『ジャダ』	45
十首詠 II	加藤嘉昭ほか	46
本部分報		64
編集後記		

表紙・カット 深津真也

十首詠 I



藁 横浜 稲葉京子

何十年はめし指輪は恙なく指の形に歪みてゐたり
イズミルの水の色をば思へとぞ小さきオパールの指輪をくれぬ
足高くゆく水鳥を見てをりぬ若き日の君を見る思いして
新聞紙を敷き蜜柑をふるまへり鳥にか小児病棟の庭
忽然と美しくなりし人のありそのことわけを占いてをり
愛なりや恋なりや何気なき人の美しくなり立ち上がりたり
あなたは美しいといへばみるみる美しくなる乙女子を愛しみにけり
この街の棗の一本をわれは愛すかち色深きその葉の色も
わたり鳥空を発ちゆく必ずや帰りくる日をわれらに約し
車椅子にて初めて町をゆきしこといまだ心のやましきとして

春 惑 名古屋 大塚寅彦

鏡の前に鏡つかへり果てしなき寒夜の奥処映し出しつつ
ひたぶるに手を待つかたち崩すなく手袋のあり寒夜の卓に
指といふわが絶険を登らする天道虫ひとつ歩みに運ぶ
身めぐりに判じ絵なして溢れるるQRコード何を潜ます
いびつなる波紋の如し映さるるCTスキャンのわが断面は
思ふとは定まらぬこと春陽さす枯山水の(みぎは)にし坐す
したり尾の鬚ながながと舞ふ尉や老いたれば舞ふほかなき如く
喉ぼとけなる仏様うごかして酒たふとしと飲めり男ら
鬼饅頭まるかじりせり吉凶に惑ふ心をわが喰らふべく
美空ひばりとイルカの声に通ふものこの早春の芯をふるはず

寒夜いくたび 岡崎 斎藤すみ子

後どれほどある人生かわからねど今持ち重るは柿五つ六つ
尾鰭まだ幼なけれども群れてゐる目高は歳末の雨に打たれむ
漂泊の心は人を厭ひつつ菊人形を今年唄がざり
加速して衰ふる意地と聞きしかど微笑に鑑ひ知らるるなゆめ
冷え冷えと眼葉に洗ひたるまなごこの世の矛盾まだ見尽くさぬ
ペランダに集まりてゐる葉の鋸歯は枯れ果てたれば這ひ蹲へり
雑木の木の裸形となりしを捲ける風鬼哭とも聞く寒夜いくたび
舌の上の柿の糖度を計りをりわれがまろやかに剥きたるものを
裸木の狭間に見下ろす巷には百貨店閉店特売の幕
落葉樹清しく散りてあらはれし光の段に小鳥は遊ぶ

人形

名古屋 杉本 容子

病むといふにわざわざ訪ね来し友はわが人形に言葉かけをり
右足のつま先上げゐる童子なり中国服の博多人形

胡弓抱きいまも唄ひだしさうにつんと突き出る人形の唇くち
土ながら衣の流れのやはらかき広袖口の揺れに風ある

つと動く様して立てる土人形 心持ちゐるひとの気配す

いかやうに土こねあげてふくよかな頬つくりしや人形師中村
ながくながく人形師系譜つづきみてその血筋に生れし青年
入院の今度は長くなるといふ友のしづかな言葉づかひよ

ゆつたりと冬の日差しをたのしみぬ友とわたしと土人形と
わが友に抱かれゆきし人形の土の手触り忘れざるべし

小金井 古谷 智子

十七年乗りて廃車の銀色の(ゼフィロス)とふは西風の神
うつつよの新車はひかるいましばし走らむこの世の煩惱を駆り
入庫せし車たちまち吸はれゆくピルの胎内胸元あたり

劇場ははるか高層地中よりのぼる透明なエレベーターに
チェ・ゲバラの映画は見ねば熱ひかぬ身をひきずりて最終の回

最終の上映会場人ひとりをらぬ座席にとりかこまれる
思想沁むひまなき行軍あどけなき少年ゲリラは身をひるがへす

熱ある身は座席にねむる匍匐するゲバラの頭上に弾飛びかふに
没薬を嗅げどなほ増す煩惱のいつよりさきが晩年ならむ

木乃伊ともならず消えなむあとかたもなきのちの世に降る今日の雪

美ら島

東海 佐野 美恵

空港へようやく着いた長時門低空飛行のあげくを那覇に
上空は米軍航路その下をゆらりぐらりと旅客機が飛ぶ

訪れた美ら島沖縄調印と握手で双市姉妹となつた

基地の町ぐるつとフェンスが囲んでる教会・病院・学校なども
抱束や監禁でもないサトウキビ畑は謳うフェンスの内うちで

巖窟王の獄舎のような洞窟の過去の事実がすこし覗けた

硝煙が漂っている洞窟の記録も今は静寂をいだけ
行かないで!風はべつとり吹きめぐりハイビスカスの赤に触れてる

海潮が伝える過去をひしひしと身に寄せながら断崖に立つ
崖を打つ波の音こそ魂のうたごえなのだ今また響く

傍聴席

笠松 村井 佐枝子

たしか桜が咲きてゐたはず岐阜地方裁判所に傍聴したる日
更生保護の研修会にてバジッ付け女性集ひぬ時より早く
饒舌を身上とする中年女性沈黙守るは修行のごとし

幾曲り廊下を曲がりどつしりと彫刻のある法廷に入る

第二法廷傍聴席に座りたり交通事故の裁判はじまる
若き女性被告と呼ばれうつむきて着席したり被告の席に

はねられて宙を舞ひたる一瞬に老女の生涯抹消されつ
裁判員制度が迫る直前の傍聴にして 曇天なりき

運転を日々とする身に遇ふ遇はざる交通事故は不測のさだめ
ダンブカーこぼしゆきたる砂利石は夕日にそれぞれ影をつくれり

春怨 / ドッベルゲンガー 東京 菊池 裕

第一次産業ほろびたる都市に家庭菜園ばかりがはやる

群衆のなかの（私）もさうなのたケータイなしでは生きていけない
わたたくしが（私）を検索するといふ遊びの果てに襲ひ来るもの
自販機のコイン投入口の闇からこみあげるこゑは（私）

モバイルでワンセグ見たる刻々に俺は誰だかわからなくなる
わたたくしはあなたといふのも変たらうひとつ車輻に百人詰めよ
終電で反吐はくやうな面持ちの忘れたころに眠りに墮ちぬ
ひとつやにプラズマテレビ煌煌と点いて暫くだあれもゐない
あかときに帰宅しをればもう既に就寝したるのちのわたたくし
またしても神の怒りを待たしてもたつたひとつのベンチに坐る

列島 逗子 川田 茂

一億を超えたる民を抱へつつ弓なり列島矢を何処に射る
列島はふるへて新たな年迎へ蠢く人等の心身を揺らす
あたらしき雪は日本の屋根に積む人は届きし荷を解くなり

陽をうけて屋根の水柱はとけゆくも引きこもりゐる人は動かず
凝りゐる水は綿雲うつしたり流れの水は川底を削ぐ
川砂は幾星霜を駆けくたり海辺の砂と混じりゆくらむ
海中へ戻れる魚は真水にて見し夢いくつ抱へゐるかな
海中を巡れる銀の魚の群 万の鱗が陽の照りかえす
深海の目のなき海老はしづしづと億年前の川砂を掻く
深海の闇にも雪は降りつつく留まることのない時を積み

ひとりのできてるつもり 海部 大澤 澄子

ブラシの木鳥の運んだひとり生えコップ洗いに似た赤い花
妻よりも長生きしそうと自立して夫はひとり朝ごとのカフェ
夫には言われたくない必ずやカレーうどんはブラウスに飛ぶ
ゆびの棘ぬいてと夫が持つてくる毛抜き眼鏡懐中電灯
十色入りえびせんべいの大袋くじ引くようで楽しみすぎる

もう一度はきたいスカートのように言いつくろつてもまだはまらない
ため息は期待の大ききゆえに出て体重計をのぼり降りする
消してあるテレビ画面は夕暮れにブラックホールのごと部屋で待つ
ひとりなら終日テレビをつけなくて深まる闇を見ているだろう
ひと眠りしたあと覚めて寝付けねば朝までシーツの冷えてごわごわ

空 江南 水上 令夫

東京に空が無いのよ本当の空を見たいと「智恵子」ややみつ
溶けあはぬ二つの空を主題に「光太郎」『あどけない話』

ひたすらに「智恵子」求めたる古里の空 鮮鮮と清み徹るらん
国里の空に重ぐる「智恵子」をば東京のそら 虐ぐるかな
片思のころばしりに「光太郎」空恋ふ妻と紡ぎし童話

ところ狭き迄の夫なる傍らさま「智恵子」画布に涙染みあつ
「光太郎」の詩に沿はんとぞおのれをば 矯めたる滾の心違か
「光太郎」なる靈氣にし 気圧さるるまま夫恋も 踰躑ひたらむ
直趣夫とのみなる自閉にて「智恵子」愛にあるにもあらず
直黒に物狂ほしく斜ちたる「智恵子」を詩ひ 倦まざるものは

花もみどり

伊勢原 大沢優子

阿修羅像

広島 中村孝子

脱出を希はずなりし ときじくに花もみどりの耀く絵皿
現状は岩礁にのる難破船 君の語法の正しさは容れず
ナツメヤシの乾果噛みをり若き日のシバの女王に羈旅の詩ありけむ
耳たちが記憶をうたふ緑鈴のピスタシオの樹下巡礼は過ぎ
老人がたゆげに割りゐる開心果仁うすき塩味かけて売らるる
素朴なる営為とおもふ実を割るは稗史のなかに長くつながり
イノセントどこか信じてゐるとして壮年の掌にピスタシオグリーン
別れしは狐狸のたくひよ振り向かず枯野をゆけば潮鳴りさわく
今日までのもろもろのこと忘れむと剪られし花をいだく花嫁
手にとらば凶器の織き三日月夜うなじのしろく花嫁はゆく

風の階段

津 人見邦子

冬のフーガ

豊橋 洲淵智子

風の階段のぼりて湿る苔に会ふ真言密教ひらかれしところ
池の面に落ちる紅葉の揺らめきて鯉はをりをり天に口開く
金剛峯寺にゆきあふ秋の白雲はたれかれに似て風に吹かるる
紅葉の重なるあはひ抜けて来し光の風が空海を呼ぶ
海を越え空海来たりし高野山端座の側をひかり澄みくる
法話きく時間のなかの甘やかさ熟柿のごとくこころゆるめて
秋ふかく口管打座なす僧の背をゆらり押すやも言霊の風
白刷毛の大きなればこそ青空を真綿のごとき雲うごき見ゆ
青澄みて光の淡き秋時間光れるままにうかうか遣いぬ
夕日溜め南天の実はふつくらと師走の風を押し返しゐる

「千年の眠り」携え奈良に向かう阿修羅の像にひと目逢わむと
はやるこころ押さえて入る仮金堂に三面六臂の阿修羅像立つ
八部象の一つにおわすそのお顔聞きしに優る美少年なり
仄あかるライトに匂う頸筋の残の朱まさに生きいますごと
善悪の心より善にたち返るべきそれぞれのひたむきの真
人に近きおもざしと見つつおもうかな 少年力士の貴の花とも
結い上げし髪に繋がる三面の奇異にして奇異にあらざる不思議
阿修羅像の細身を飾る装束のなかでも美しきスカート裾
裾に咲く雅やかなる法相華うつつにはなき円形の花
返り見つ返り見つして仮金堂を出づれば大和は瑠璃天の秋

「チャレンジド」まだなじまざる言の葉を連ねて冬の絵画展始まる
鳥が来て木の実ひとつをくはへゆく街路の樹樹のみなスケルトン
背後より冬の日ざしを浴びをれば歪んだフォルムを映す円卓
また少し空が広がる広がりし空の分だけ季節ひろがる
葉をぬぎて背すぢをすつこのぼしたる意志もつやうな樹をくぐりゆく
吾がひと生もこんな形に終はりたし櫛の古木の冬に穏しき
哀しみは詠はぬが良し落葉ののちの花芽の空にひた向く
それぞれの思ひの欠片置きてゆくチャレンジド展守るわれに寄りきて
雨脚の激しくなりて裸木の黒き千手はさらに尖りぬ
居場所なく中途半端な態たもてばかきくもりゆく冬の一

胡蝶蘭 清須 河村良子

葉騷 名古屋 間宮喜久子

クリニツク開院のしらせ届きたり川道遙と下りし方より
新築のクリニツクなり秩序もて硝子のうちら輝くばかり
胡蝶蘭の鉢植えあまた置かれあり厳かにして親しみもてり
胡蝶蘭の白に囲まれ佇めばわれはかの世の過客なるべし
生真面目な医師と馴染みてきたりしを今日の微笑みはにかみてみゆ
この川を下りて行けばクリニツク鷗の白は白衣の白

「川岸の散歩道」と名づけられゆるゆる歩く老人の群れ
カチカチと拍子木高く鳴りゆきぬ寒に入りゆく音の清しさ
密やかに更けゆく窓辺亡き人の歌集重たく膝に座りぬ
眠りと死同じと思えど眠りとは苦しみものぞ自我との闘い

サイレント ストーン 小牧 大屋邦子

マイホーム 豊橋 大橋美知子

十五夜の月欠けはじむ餅をつく兔のすがた未だ保ちつつ
検査値の異常でこぼこ 満ち足るも欠けるも過ぎぬ十六夜の月
血糖値めっちゃ高いよ如何してくれる祈りはいつもいちゃもん付けから
夫に似てゆつたり話す主治医にて溜まりし不安ぶちまけている
自らのお腹に突き刺すインシュリン打つお覚悟をビックリマークが三つ
前とあと交互にページ繰りながらミステリー読む小春日の椅子
失語症夫の「ガ・ン・バ・レ」背に受けて血糖値のためウォーキング
一枚も散らしていないね柿木の紅葉が朝日に照れるを見あげ
柿紅葉われは臓器にサイレント・ストーンを深く隠し持ちいつ
黄金に光りてあれと銀香葉は一億五千万年前より

庭園を魚の如くに回遊する時間差のある楓を巡りて
紅葉に心を預けて東福寺の庭園を巡る傍らの友と
紅葉が重なり合つて鮮やかさ更に増したり撮影スポット
信号を待つ間見上げる銀香の葉はレモン色の光に染まる
道形に続く公孫樹の黄葉に街の形は曖昧になる
森の色が暖色からモノトーンへ移り行く様を見届ける窓
ふわふわの雪を踏むよう黄金の厚き絨毯に足跡はいくつ
あちらこちらブルーシートが掛けられて整然と並ぶマイホーム群
とりあえず骨組みが出来て徐々にマイホームめく新築現場は
建物に夢をいっぱい詰め込めばスペースの空きはわずかとなりぬ

鉄の街から 東海 滝田恒春

少年(三) 岡崎 神保昇二

十二月一日鉄の記念日にふるさと釜石華の賑はひ

駅前建ちて見守る銅像は大島高任 製鉄の父

鉄の街釜石出でて新しき鉄の街づくり早も四十年

縁ありて製鉄業に職を得て鉄の街づくり思い出尽きず

東海で育ちし子らも子を生みてふるさとのこと語るこなし

ふるさとを守る弟一家より心づくしの海幸届く

民族の大移動と呼ばれたるわれらあまた根付けり名古屋の土に

みちのくの鉄の街から中京の鉄の街づくりややに老いたり

ひねもすを寝込める妻の枕元ふるさとのこと語るひととき

秋まつり文化祭済み年の瀬に賀状欠礼の訃報相次ぐ

戦争 阿久比 宮沢 実

秋の香 津 松岡孝子

爆心地に近づく電車単調な線路の継目の音を聞きおり

立ち止まり振り向いてまた老人は原爆ドームに目を凝らしおり

夕暮れて灯る平和のともしびは時折不安げに揺れておりたり

原爆ドームの曲がりいる梁降る雨に涙の如き滴を垂らす

再びを尋ぬれば原爆ドーム川面に静かな姿を映す

悲惨なる原爆の資料巡りゆけば記憶は過去へとワープしてゆく

停車するジーブに群がる幼な等にチヨコレートばら撒く進駐軍

空襲警報に消灯をして静まれる峽に螢の光飛び交う

B 29の編隊がゆく白壁を黒く塗りたる土蔵の真上

暗き空ゆく爆撃機犯したる罪を悔いいる気配もみせず

二階建校舎に移る三年生わけある噂の暗き階段

濡れ雑巾固く絞りし手はしもやけバケツに氷れる水は解けざり

手をつきて蛙と化して拭く廊下五十を数え行きつ戻りつ

北風の抜ける廊下に整列し正座の修業は足痺れさす

今日からはアメリカ相手の戦ぞと「鬼畜米英」意味なく唱う

吐血せる父の臥したる暗き家窓辺に消ゆる沈む太陽

頑なに手術拒みし父逝きて野辺の送りは雨に打たれぬ

秋空に輝く柿の赤き実の最後の三つ鳥に残せり

薄明の西の山並げぶる中神の出づるか低き地鳴りは

先生の譚名飛び交いし教室の「おおかみ」「こげパン」今も健在

ジヴェルニーの蒼穹なつかしき絵葉書に友の暮らしの闘病の日々

前向きにつづる感謝の後半に故郷の母御を気に掛ける友

秋の香のキンモクセイに病院の匂い抜けると友は喜ぶ

免疫力つくと友言い筆生姜わが手作りに食進むなど

二年半と言われし友は一年を生きしと健気に言つてのけたり

花のレッスン友は生徒に励まされ治療の間を解き放たるる

二十五人の生徒の祝うパースデイ初秋めでたき友の還暦

ふるさとへ戻りし友とおしゃべりの庭の時間はたちまち過ぎぬ

遠住める友の代りにひとり居の米寿の母御に誕生祝を

高齢の母ゆえ病気伏せおくと心情伝え友はほほえむ

晩秋

一宮 岩田正治

松の木の根方に黄色鮮らけし石露を避け脚立を立てる
見てくれる人の無ければ裏庭の木の枝はつさり容赦もあらず
塀越しに隣の庭木垣間見てプロのなしたる剪定真似る
妻の留守ひとり脚立に庭木切る鋏の音のことさら高し
見上げいし皇帝ダリアの華麗さを脚立にありて篤と楽しむ
一段と松を切り下げ幾たびも脚立を降りて見栄え確かむ
切らんとする枝に毛虫が力なく這うに呼び掛くおまえもひとりか
脚立から見下ろす窓は翳りきて独り作業の侘しさつもの
会の後お茶して話はずむらし妻は帰らず日は傾きぬ
秋の日は疾く翳りゆき気も萎えて剪定半ばで脚立を降りる

鉢の木

取手 菅野正弥

畳の間に端座し謡ふ謡曲の「鉢の木」に思ひ自づと籠もる
遠き世の佐野の渡りに雪深く難渋の日の旅僧を謡ふ
降りつづく雪に旅路の困難を覚り一夜の宿求めゆく
この家の主がやがて大雪の降り積もる中を帰宅し来る
「ああ降つたる大雪かな」と告ぐるこの家の主述懐す
旅僧請ふ一夜の宿も見苦しき住まひなりとて叶はじと告ぐ
かたくなに宿叶はじと告げし主妻より請はれ泊りを諾す
大雪の道を追ひ掛け追ひつきて一夜の泊り熱く勧めつ
世を捨てし主の秘蔵の鉢の木を焚きて持て成す真心温し
遠き世に出会ひし武将の雪の夜を想ひ画きて謡ひ続けぬ

八尾坂の街

有松 中濱郁雄

編笠の下より笑みのほの見ゆる踊り子の列胡弓に即きて
若き顔のぞき見えたり風の盆あみ笠揺れて三味の音揺れる
さ夜ふけて踊り疲れし踊り子の笠も休めり宿の端居に
寺庭に輪踊り見おり夜のふけの月あおぎつつ唄に聞きほる
坂の街寺多きまち 詩のまち胡弓と三味の流れる八尾
輪踊りの中より手まねき友を呼ぶ手拍子と共に輪の広がりて
耳すまし唄声たよりの風の盆 角曲りゆき踊りに出合う
門門にばんぼりゆるる八尾の夜行きかう人の笑顔明るし
町中にばんぼり灯る夕まぐれそこかしこから踊り手生れて
ばんぼりが一つ二つと消されゆきおわら踊りは終りとなりぬ

人形は知る

逗子 土川誠子

見開ける眼窩に深き海を見る幼より待つ古き人形
八十路まで寄り添ひくれし人形の眼に映る過ぎ行きともに
名付け親の私が忘れし呼び名なれ「ごめんね」小さく謝つてみる
幾年も出さぬままの人形の淋しげな頬「私」を責める
水害に置いては行けぬ人形を必死に抱き逃げし日のこと
困惑の父母の諦め掠め見る抱へし腕の感触なつかし
人形の纏ふ着物の色は褪せ幼な日母の縫ひくれしもの
膝に置く軽さ愛しく母の手の温みも伝へ人形は笑む
今日一日この人形に係はりて微かな汚れそつと拭へり
トランクの中に眠りし幾年は知るか知らずか病得し日々

菊の香

名古屋 山田峯夫

虞美人草

稲沢 伊藤京子

枯れ菊を焚けば菊の香ほのかにてひとり黄昏に染まり佇む
築山の寒椿けさ一花咲く昨日は古い過去と捨て置き

そこはかとなく菊の香はただよえり紅葉と枯れ菊燃え上るとき
美しとみてやがて憐れと思いつつ銀杏の黄葉を今朝は掃きおり
振り向けば銀杏落葉の散りしきる黄色の視野に踵つ友がある
ゆきずりの人は綺麗と見てゆくも銀杏の黄葉を朝夕に掃く
寂庭を闇が包めば幼子に冬の星座の名を教えらる

ふるさとは優しい響きもつ言葉現は灯らぬ家あるを知る
もう虫の出番は終つたはずなのに石路の黄花に今動くもの
十三日の金曜今年は三度あり生きて無事なら幸せなのだ

鐘

海部 鈴木寛子

越冬

岡崎 近藤寿美子

ノートルダムの寺鐘の音にユーゴーのせむし男の哀しみをきく
八百屋お七の半鐘の音を聞く錯覚に消防車の鳴らすサイレンを聞く
柿喰へば子規唄ばせて甚目寺の鐘が鳴るなり入相の鐘

鐘三つ鳴らせば歌手の登竜門ノド自慢に湧く日曜の午後
相山女学校の金剛鐘の鳴り初めて長きいくさの終焉を知る
日泰寺の「鳴らずの鐘」は赤だすき掛けて召されぬ永遠に鳴らずに
長崎の平和の像の指す彼方にひびかふアンジェラスの鐘
遺愛寺の鐘は枕をたてて聞き甚目寺の鐘に夕餉を急ぐ
かねたたき秋が来るぞとひたすらに翹ふるはせてかねを叩きぬ
暮れ行きて諸行無常の鐘の声鴉の数羽ねぐらへ急ぐ

始皇帝の死して宦官趙高の号泣したりほくそ笑みつつ
不遜なる人の築きし阿房宮不遜なる人の手に焼かれゆく
ひゆんひゆんと鴻門のつぎ乱舞せり劉邦の頬掠め目掠め
放たるる人心の矢はひやうふつと弋ぎ胸板射きつたるなり
范增の碁石打ち抜かぬ張良の隠し持ちたる白石ひとつ
矛は盾を刺し盾は矛折らしめて生死の海に金音とよむ
四面より合唱する楚の歌やさし兵らの傷を疼かすばかり
舞ひ果つる宴のはたて虞姫美人白きうなじの後れ毛ふるふ
国原のかたちやややに定まりぬ血潮の雨に洗はれながら
紅き羅を摘まれ摘まれて虞美人草平らけき世を待ちて咲きつぐ

北に棲むナキウサギ夢にあらはれてきると泣く冬の入り口
薄暮性小動物にあらねども惹かれ曳かれてゆふやみの街へ
金星と印貼りある黄の林檎手にとれば過去はつかに光る
波が寄り波が引ききゆつくりと死は満ちてきぬ剪のからだに
無口なりしひとが逝きたる夜の淵に聞きとめむ底に沈むことばを
夫の持つ箸より受けし骨片の小さくあれば箸は震へぬ
中空にかなしく高き煙突は立てり越冬の湖に鳥は着きしか
葬儀終へ手を洗ふ夫まざまざと蛍光灯が曝して細し
音のせぬ居間はしづけし銀の皿に銀の鍵置き入りゆかむとす
爪の下にやはらかきうすもの爪生えしことなど誰にも言はず

林檎のうさぎ 岡崎 吉田光子

片方の耳が短くなりすぎてゆふべきびしき林檎のうさぎ

櫓に乗るサンタをダウンロードしてパソコン画面は雪積もる町
五センチに満たぬガラスのトナカイの透きとほる目に追ふゆめ清し
無力なるわれを慰めゆつくりとオルゴール・ツリー「聖夜」を奏つ
日溜りにふつから瞑る野良猫にひととき幸は充電されるむ
落葉を終へて銀杏はためらはず思ひを空の奥処へ伸ばす
うつかりとリンス忘れた朝の髪不安きしきしひた寄りてくる

私はねばならぬ火の粉の多き日なりセールスマンが次々と来る
ひんやりと発光してゐるやうな雨細く降りつぐ夜のコンビニ
把手なきドア開かれてコンビニといふ名のひかりの小舟に吸はる

柑子色 つくば 長谷川と茂古

屋餉あかるい部屋で吾ひとり碗を上げ下げしてをりぬ
ゆるやかに抹茶入り玄米茶ながれ胃の腑の底を温めてをり
風圧とつくばエクスプレス到着すホームの人の髪を逆立て
『黒死館殺人事件』開きゐる向かひに座る眉濃き少女

箱ひだのスカートの下組み換へるハイソックスにタツセルの靴
目に見えぬバリアー発しうぶ毛たつ柑子色した少女の耳朶は
大きな跳躍 風と枯葉のパ・ド・ドウを目前にせり冬の公園
何ごとか言ひかけてまた潜りたるおほきな鯉の厚きくちびる
灰色の鯉が起こしし波紋なり空と公孫樹はかすかにゆがむ
はるかなる富士山の影西にみゆたぐれの気は冴え渡りけり

おもむくままに 一宮 安藤なを子

竹林に風の生れたり思惟するわれに木洩れ陽揺れつつこぼる
ウイスキーグラス手にせる肖像の掲げあり最後の犬山城主 正俊
もみぢしてその実いろづくマロニエのはや散り敷けりペープメントに
薔薇ほどなマダム貞奴愛しみし紬の丈の短かかりけり
なにか目に見えざる神の恵みかも出掛けに車のキー見当たらず

1122のナンバーことさら目につけり平和日本 高速道ゆく
わが人生のごとき蹉跌やかの一首先に進めぬ腰の三句に
こゑいだせばはつか傷みの消えてゆくイヤイヤ受けし電話のかなた

お天気の話題のみには寄り添へず打ち解けられず昼の職場に
美しくあるには秘密の時間などあるはずもなし老いてゆくなり

六十路坂 浜松 山下浩一

そこかしこ政治論じる季となりてひとつの星がマイクを握る
これやこの火急の議題何ナンダーインフルエンザの鳥にマスクを
よるめて踏み潰したるプラモデルくにつかきどる処メチヤクチャ
あれほどに棘ある枝の赤い実を啄む鳥のワザ盗みた
友人が読めと差し出すエッセイに不具載天の四文字居座る
民営化、便利はどちら！十月のなかば賀天の注文きたる
平凡を丸ごと抱え六十路坂くだるそのとき縦なる虹が「！」
忌み嫌うものに近付きある人の一生を覗くわが浅はかさ
わがうちの火種を捜すまでもなく炎ゆる紅葉がわが身を燃やす
錦秋の山をことほぎ終えしがに深紅くるすむ水引草は

鳥旅 扶桑 和田悦子

山脈の左右が鳥をふた分けて両津の港低く平らか
遠流とふ言葉世阿弥の世までとふ觀光ガイドの系図よろしき
江戸無宿の第一号なる鳥送り品川無宿市五郎二十九歳
無宿人の送り状とふ稀なるも名簿の残りし屏風の下張り
酷使服従忍耐と見る採掘の人形模型の時に動くも
鉱道の闇は四百キロときく此処の湿気に脂汗して
錯綜の闇とも回る坑内の入墨人足ドラマに見し人か
二千人余とあり水替人足の利潤生まぬと酷使の惨さ
娑婆の女を抱きてえなあーと人形の抗夫たあひもなき語を吐けり
嵯峨野にも似る山麓に塔見えて定家 資朝流刑のこの地

時雨 碧南 岡村千穂

粉雪とまごう小花は終の香り運びて立冬穏し
きびしさの予感のあれば小春日は慈母観音のまなざし持たん
時雨るれば思い出さるる恥ありて冷たき雲に濡れつつ歩む
紅葉は時雨に濡れて石畳の茶庵訪う後背寒し
ようこそと客迎うるを心得て白玉椿一枝品よき
墨跡の「無事」は掛かりて黒楽の茶碗掌に乗すこの臘月に
紅かえでは命の極みさざんかの白は耀う冬陽に透きて
宗達の風神雷神図にはなき新インフルの魔神の脅威
三千キ口翼休めぬ渡り鳥の遣伝子制御に狂いはあらぬ
さわなるは健康チェックの憶え書き去年の日記になかりしものぞ

竜虎相搏つ 小牧 大澤ひな子

この風に自転車漕げば倒さるる駅まで十分歩みて行かな
径の辺にひそと咲きゐるみみな草、ペンペン草は撥の実つけて
文化の小径たどりて向かふ和太鼓の再度のライブ扶桑会館
〈光〉とふ字に見ゆ 林英哲の太鼓打つうしろ姿は
打ちのめさむ如く激しく打つ太鼓思はず拳握り締めたり
弦たたく撥の捌きの目まぐるし神の手技か木之下真市
英哲の桴と真市の撥のデュオ 竜虎相搏つごとく熾烈に
三味線と太鼓のコラボに〈花の鳥〉ふとも頭ちくる若沖の鶏
弦の張り少し弛みて正調の津軽三味線ころろに沁みる
遙かなる穹へ消えたるわらべ唄憶ひ出さるる 〈太鼓打つ子ら

落葉の頃に 東京 五十嵐喜久代

秋深み代々木に天幕張られゐてコルテオ見むと集ふ人波
コルテオと言ふシヨーを見る人間の究極の技に暫し見惚れる
国籍の異なる演技者多彩にて髪・肌・瞳とシヨー華やげり
団員に日本青年活躍す息呑みて見る鉄棒の競技
熱気満ち拍手の渦に身を置いて心とらはるシヨーの二時間
秋陽さし人影無きにブランコをかすかに揺らす風の手のあり
同窓の友の訃を聞く十月の終らんとするに声くぐもりて
公園に落葉敷かれて夕光の射すしばらくは茜燃へたつ
暮れおちし園に落葉の敷き積り声ひそやかに夜にとけゐる
移ろひの早さにせかれ落着かず無為に過ごせる日々を悔い居り

校歌をうたう

名古屋 山中ちゑ子

懐しみ校歌をうたう友達と半世紀余の絆愛しむ

八十五年の母校の歴史たどりつつ祝賀の宴に肅然と立つ

夫と同期を恩師おぼえず名乗り来てその若若しさを羨しみており

「越の寒梅」これは銘酒と嗜みて盃を重ねる代る代るに

解禁のボージョレー・ヌーボーとくくと注ぎほかに頬を染めたる

制服にバラ園巡りておりし時外つ国人はカメラ向けたり

スマイルと優しき目差しもつ人はアレキサンダーと名乗りて去りぬ

ひと月を経しのち届きしエア・メール宝物となる写真と共に

一会とはかくなることか幾度も写真撮られてこころ炎え立つ

想い出はいくたび脳裏をかけめぐり寝つけぬままに暁となる

もみち手折らな

三重 山内 昭子

猫じゃらし素枯れ狗草ゆれやまぬ暮れ早き野の風のすさみに

枯れ蠟螂枯れ木の小枝と思ふまでおのれ失ふ踏まれてなるか

ひらひらとゐてとどまれる葉表に乗るザンカ力の白き蝶たち

目で見よと言はれおぼろに視るばかりわが大掴みの歌生れなずむ

止め給へ救ひてたもと乞ふほどに眼二つはなほ文字を追ふ

替へたしと思へるものに幾つ椎の実こぼれ落葉を急ぐ

喉塞ぎしは如何なる果実なりしや弟は栗の実ほどなる病ひ患むとぞ

柿落葉散りてやがて栗落葉序列なき世の人事他所に

ひととせの終始かつげる空の青もみぢのあはひ 桜咲く隙

棒げもつ人もあらずてななとせを七度彩ふもみぢ手折らな

面ノ木峠

豊田 勝 弘美

南限といはるる山毛櫸の原生林眼前にあり面ノ木峠

並び立つ山毛櫸の巨木に耳をあて幹のぼり行く水の音聴く

木洩れ日に幹たくましく立てる山毛櫸梢あふげは空青かりき

登山道の入口あたり「熊注意」墨くろぐるくと看板の立つ

山雀の声を目で追ひ歩み行く面ノ木峠の山毛櫸の林を

ぶなの林ぬけ来し風にゆつくりと風力発電の風車は回る

一頭が鳴けば数頭呼応する高原牧場に春の陽の照る

黒毛和牛のやさしき眸に青空の白雲一瞬映り消えたり

人の列ながながと続く芝桜見むとリフトを二時間待てり

芝桜見下ろすりフトに見ず知らずの人と乗りたり山びこ聞ゆ

新開の団地

島根 尾崎 テル子

町角に元氣小僧の像立ちて団地世話人の心意気見ゆ

万灯山まねとうやまくづしし土にてこの団地造成したと古老は語る

広き街路にスズカケ並木鮮らけし異国めきたる新開の団地

団地二つをつなぐは菅田すがた跨線橋眼下はるかに鐵路が光る

草深き古道尋めゆくに天空を高速バスが光りつつ行く

石見なる古道のかたへに杉の根を屋根に目鼻のなき地蔵立つ

秋の日のあまねき団地の山際の石見焼なる窯元を訪ふ

ここのみは鉄骨建てとあるじ言ひにぶく光れるガスの窯並ぶ

母のお骨二年あづけし真行寺親鸞立像参道にあり

寺庭の真中の天突く銀杏の樹午後の日しろし枝のあはひに

庭の石路 豊田 篠田 広美

神無月庭の石路鮮やかにふかき青空黄色に照らす

梅の木に嘴打つ鈍き音のしてコゲラは庭に頻繁にくる

素通りは気楽にできぬほろほろと零るる白萩に若き日重ぬ

五十余年の入植史ありし柿畑にユンボのアーム忙しく動く

用水の堤に芒生き継ぎてしるがねの穂みな吾丈を超す

ほろ酔いの帰路らしき声ふとぶとと午前前の空に青鷺はゆく

数時間のいのち池の面に煌きて菱の白花沈みゆきたり

〈お父さんの歯バッチイ〉頬擦れる胡坐の中の娘に言われたり

朱に輝りて吉野もみじは裏表かえりつつ夕べ庭に散りいる

娘の齢にかさぬるもみじ吹かれいる一葉の行くさき見届けおらん

妹に 岡崎 沢田 昭子

父の顔記憶にあらぬ亡妹は彼岸の淵に迷いおらぬか

逝きてより一年半過ぎし妹にメール送りたし甥は娶ると

独り身の甥案じつつ病床に臥しいし亡妹を今は偲ばん

いもうとを悲しませいし気がかりのひとは晴れて甥結婚す

世に在らば婚の祝宴喜ばんと亡き妹の子は挨拶す

よき嫁を迎えし報せ亡き人に今届くかと声張り上げき

妹の遺影を抱きいる人のかたわらに寄るわれは姉にて

はらからの末に生まれし妹が先に逝きしを又も嘆けり

一葉のスナップ欲しき姉とわれ面影偲ぶよすがとなれば

姉九十歳黒留袖に装いて甥の門出に目を潤ませぬ

戦後遠のく 美濃加茂 桜井 五月

桑の実を下校途中に友と食べひもじさ耐えし戦後遠のく

戦いもはるかになりて後の世もまどかなくらし続くを願う

それぞれに生き来し人をうけいれしホームの庭に朝顔咲きぬ

ふり続く雨に散り敷くもみじ葉はからくならないに泣きいることし

かしましく物言いつつも集いくる孫ら待ちつつ準備に追わる

省エネと言いつつ年々派手になるイルミネーションに疑問いだきぬ

新刊の五年日記に初書し共に生きたし書き終えるまで

かりかねの列なし朝飛びゆけば朝の光は広がりてゆく

人の世のはかなさ写し散るもみじ青く透みゆく冬の光に

冬の日に庭の千両色づきて新しき年風と待ちおり

三朝の湯 島根 宮里 勝子

ひとたびも袖通さざりしを貰いたる手縫いのベスト背に暖かし

いつの間にか背の三センチ縮みたり作業ズボンの裾上げをする

枯れ色の景色移りゆく汽車の窓に日本海が見えかくれする

山あいの天神川の一とこ外湯の囲い小さく見ゆる

歌会までの刻を惜しみて見学の投入堂は木の間に浮かぶ

鳥を取る由来と聞きし鳥取県の「さいとりさし踊り」の熱演に見入る

伯備線のはげしき揺れに車酔いせる友は言葉なく身じろきもせず

駅前的小さき食堂の女主人我らを送りて店の灯を消す

ラジウムは世界一とうこの湯に短歌の友と背を流しあう

旅遠く集い来し短歌の師も友も三十一文字の依存症ならむ

沈下橋 四十万 左山 遼

朝の靄たつ町川の対岸に片寄る鴨の声賑々し
わが青きワイシャツが好きと言ひおりし女も遠き点景となる
武蔵にも比すべき佐川幸義を知りし驚きに旬日の過ぐ
山の端に傾きゆく陽が觀光のざわめき去りし沈下橋を照らす
その上の異性恐怖のわたくしが料理教室の黒一点とは
お料理の講習なれば黒一点の僕に皆がとでも優しい
魂の有り様を問いただすとぬばたまの闇に鳴く牛蛙
金曜の夜に下血をしてよりの診察までの重たるき日々
身を寄せて暮らすものなりにんげんは此処も深雪に軒並べたる
頂に立ち見はるかす仲秋の四国連山果てまで青し

卒寿 江南 中井行雄

卒寿われ体力・気力未だあり乗鞍岳や穂高へ登る
西穂高の展望台に佇めば槍ヶ岳など蒼天に聳ゆる
雪残る畳平の御花畑見入るわれらを霧の襲へり
乗鞍のスカイ・ラインのヘア・ピンをバスに揺らるる祈る心に
乗鞍の御花畑を訪ぬれば高山植物鮮やかに咲く
朝市の新鮮な野菜数多提げ妻はいそいそ帰り来るなり
故里の墓地の周囲は拓かれて柵目の稲田垂穂のさやぐ
故里の農業用水整備され我田引水の水番要らず
炎昼を街路歩めば赤となり電柱の影に身を潜め待つ
徒然にわが腕見れば日焼けせし肌は皺みて老いを曝せり

つれづれ 名古屋 尾関雪江

指環ゆるくなりたり体重へりたるは年とりし故かとしきりに思ふ
茶の稽古に並びしわれの膝うすく悲しかりしこと思い出す
文章の書ける人などと言ひくれし彼まつ先に我を誘へり
ウォーキングに行くとか出かけし子夫婦の留守にて何時も同じ一人居
細々と世話やき出かける息子なり独居十年の私の為に
寒さには強かりしわれも年と共にこたつ入用となりし此頃
障子張りいつも自らしてゐしが今年専門家にたのみし息子
夫逝きしは既に十年前今私が行つても傍ら空いてゐますか
こんなこと書いたら涙出てしまふ此頃私も気弱になつた
三時にはコーヒー飲みに行くことに決めてをりしに今日は雨降り

素敵な時間 豊橋 白川奈々子

ゆるやかに樹々の間が明るんでやがて黄葉の迫りくる刻
街々にクリスマスツリー飾られて子等は元気に周り明るし
日本でも（清しこの夜）歌はれて幾十年をわれらききしか
ロビーにて集まり来たる人たちと何気なく会ふ家族のやうに
誰にでも一つか二つ忘れぬ素敵な時間があるのではないか
歌を想ひペンを手にして思ひ出すあの顔そして笑つたことを
嫁・姑・小姑よりて三人が或る日仲よく街に出でたり
泣くよりも笑ふ他なきこと多く現実人は人知超えてゆくのか
来る年も生命たまはり在るならば平和を愛し人と生きたし
去年の夏 意識混濁なせる夜に広き夜空の一点を見き

冬ぬくき日に 高山 桜井幸子

傘ならべ干しある如くに雪吊りの縄くつきりと青空を突く
松吊りて空に伸びたる縄にいま下弦の月がとおくかかれり
何となく幸せ心地に町歩むボージョー・ヌーボーとフランスパン買い
丈高きポインセチアを選びおり今日のわれへの奢りとなして
藁わらの田に降りし雨光らせて冬のぬくとき飛驒のいち日
駅売りの生酒「氷室」の見本瓶冬ぬくき日を照り返しおり
雪積めば野の害虫は死ぬという暖冬嘆く農婦に宜う
亡き兄と買いて旅せし飛驒弁当白川郷を列車で食みぬ
被爆者の役員会に組したりなべて年齢は八十を過ぐ
認知症の兄訪うと老い夫は名古屋ゆきなる一番バスに

安全帽子 春日井 小平郁子

もてあまし靴ひきずる下校の児厚き童話の本を抱えて
際立ちて背高のつぼするすると柵渡りゆき猿のごとし
半ズボンの腕白坊主ハーフらしすれ違いざまにっこり笑う
休まむと歩みよりゆく木のベンチ児童ら占拠すカード遊びの
〈今日は〉挨拶かわす明るさのざわざわ道にどんぐり拾い
ゆきずりの声をかけたたりただ一人なかなか足の進まぬ児おり
帰らむと階段見上げめざす児が弱音吐くなり 休んでゆきたい
待ちくるる家族ありなし道草に父母のこと訊きそびれたり
人影の差さぬマンション群の街襲われそうな不安かすめる
大樟の下にて別れ昼さがり見え隠れゆく安全帽子

黒鳥に遭ふ 江南 坪内はな

岸の辺に人ら寄りゐて何ならむと吾も寄りゆき 黒鳥を見る
知る人も稀なる今日の木曾の面に出遭ひし黒鳥眼裏に刻む
黒鳥の姿やさしく木曾川の秋の一日この被写体に
眼交を黒鳥悠々淵ぶちの面を小さく掻きつつ昼を遊べり
鳴に来て黒鳥にも遭ふよき日かなこころ湧きくる今日の木曾川
この広き木曾川岸に飛び来たる黒鳥一羽なぜか気になる
こずえにも重く実りし温州みかんこのふくよかさこころ温もる
みかんの樹も小庭に繁る庭木の一樹ともに庭師に枝を剪られぬ
五十年を庭に伸びたる蜜柑の木電線危ふく窓辺に見上ぐ
脚立に高く蜜柑の収穫せる息子慣れぬ庭仕事 気をつけなされ

エリカ 名古屋 海野灯星

立冬を過ぎればポインセチアにまじりエリカの鉢植えを見る
十三で『嵐が丘』を知りて後頭うしろより離れぬ紫荒野
凶書室の凶鑑幾度もめくりてはヒースを調べし十四の冬日
日本にてヒースはあらずエリカとう近種を知ればしきり恋いたり
冬の日の露店の隅でひそやかにエリカありたり親にねだりつ
紫のエリカわが家で花ざかり窓の内より見し喜びよ
英国でヒース咲くのは夏と聞く七月生まれのエミリにふさう
姉のなきこの身にとりてその女は遠くひとにありて身近に思う
話すことあらばエミリに問いたきは「内なる神」を思いし瞬間
その女の答えは無言両腕にかかえたヒースただ渡すのみ

風 扶桑 中山哲也

今日もまた体使えと葉を散らす忠実なる風よ 見ぬ事にせむ
葉を落とし尽くせし風の手遊びや唱歌のごとき響き押し合う
流行りいる豚の絡みし乱れ風 戦中生まれはトンしゃぶを囓む
温泉に河豚なべ待つと木枯しの呼ぶ夢見たり子には言わずき
一太刀を浴びせしずかに葬りたし痛きからだをつつく空つ風
北風の吹きいるなかに我のかげ日向ぼっこすと寝そべりており
小春日にうめの蕾のふくらめば恋のはつかぜいまでもそよふく
うみかぜとかわかぜひそと陸みあう鱈の跳ねいる河口の夕べ
竜巻に巻き上げられて雷神に「ごつん」を食らい地獄みし夢
手回しの扇風機もあるいまのエコ汗かくばかりの運動ぞよし

マハカリ・プラビ 笠松 久納 千晶

ネパールのタルプの村に学校を建てんと決し現地へ赴く
夕映えのカカニの丘に着くまでに幾たびカーシートに腰を打ちしか
見渡せば段々畑の土乾き農婦ら寡黙にのろろ動く
暗き小屋に親子は眼光らせて裸足でじつと空見上げいる
薄闇に目を馴らしつつ宿に着けば停電の中女学生に会う
同宿の女子学生は日本人翌朝モンゴルへ発ちて行きたり
十人の建設委員と村長と四つの教室の見取図を囲む
砂埃被りて着きしタルプ村何処からともなく集いし群衆
よるこびに笑まえて応う村長も我らと同じレイを掛けいる
ぼつぼつと語りてドクター目指す娘に我が持参せる衣服を与う

コネチカット 松江 林 瑞人

砂針の音途絶えたる真夜中にコネチカットと咬いてみる
サセックスの羊一匹二匹さへわがものならねば絵本閉づべし
ゴルゴダの丘はるかなれ目覚むればわれは両手を投げ出してゐる
大声でカッパドキアとさげびたし静かな静かな晴天なれば
思ひ見よ天動説に抗ひしホッテントットの母の乳房を
舐めてこそ知るその辛き青春はザルツブルグに捨ててしまつた
藤色にワシントン広場の夜は更けてバンジューの音のいまだ恋ひしき
われはしもサマルカンドに朽ちたらば白骨白砂清しからむや
差し出しし手紙は闇に吸ひ込まれポーランドまでゆくのだらうか
もう二度と会へない街よ上海よ微笑ましめてシャッターを切る

電飾 知多 内海 康嗣

電飾に彩られる空港を機窓に凭りて眺めてみたし
満天の星を仰げば学びいる人に重ねて吾の蘇る
刈田には三角形の藁ならび苦手なる幾何思い出しおり
厭いきし鴉なれども子が居るかも知れぬ秋の暮れ方
摘果せし蜜柑競いて食べながら顔歪むるもうましと孫は
柿畑と呼ぶる町の柿の木は嘆きておらん宅地化進む
宿の連れにふと誘われぬ鳴子持つよさこいソーラン覚束無き
今朝も見き歯を喰いしばりのたうちて見えぬゴールへひた走る夢
高座の杜を抜け出て特養へ養父の呼びしは何かと案ずす
せがまれてサーカスに来てねたる孫光る剣とかポップコーンなど

青蓮寺湖 名古屋 池田泰規

限り無く広がる青さに家こもる憂さを振り捨て釜戸へ向かう
時雨降るこの静けさは身に沁みる独り身なれば詩作にふける
語り合い連れ立ち行くももう間近青蓮寺湖の秋の照り映え
優しげな秋波送られ他愛なく情に溺れる男の悲しさ
深みゆく秋の寂しさ身に帯びて青蓮寺湖の孤愁に浸る
幾重にも連なる山を眺めつつのんびり憩う露天のいで湯
秋日和湖畔料理を味わいつつ連れ合う人と談笑つづく
小太りのカラオケママと二人きり今宵デュエットのオンステージに
カラオケの客もいろいろ厭うれば酔った振りして狸を決める
無駄省く事業仕分けにスパコンの夢を消すなど偉い人々

孫の将来 東郷 近藤 恭年

新生児光の方に顔を向け翔けるがごとく手足動かす
窮屈なベビーバスでは泣いた児が大き湯船にゆったり遊ぶ
吾が胸でおしゃぶり押さえて孫抱けばわが乳吸われる感触不思議
にぎりしめし右のこぶしをじつと見るクーファンの中孫は意志みせ
吾子の時何も覚えてないからか孫のしぐさがすべて新鮮
歯がための石を借りきてお食い初め終りて皆で社に祈る
真夜中に赤子の声に起こされて丑三つ時から短歌見なおす
有明の望月見つつ考える孫が生きゆく未来の国を
将来に借金残して食いつくす愚かな民ではないはずわれら
若者に大き仕事をまかせると聞きて入社す戦後のわれら

山眠る 可児 横井芳夫

人の世は人の世として山眠る綺羅なす鳥の夢を見ながら
街中の人に追はれて共存とふ神意背負ひて逃げ回る猿
習性の如くとなりて一円を拾ふ悔しさ西の市にて
労ひと思ひて飯を殊更に褒めれば妻は古米とぞ言ふ
居眠りに終る瞑想掛軸の達磨は未だ我を凝視す
白鳥の首を洗はぬまま来たり利休鼠の色を惜しみて
溜まれ溜まれよ大原の落葉溜まれよほうら踏んでやろ
野の果ての風の死にたる一茎に止まる蜻蛉に重さはなかり
覗き込む水にも一つ後の月ありて御空と光り合ふかも
近松の油地獄を見し帰途は我が背に何か負ひ来る気配

インディアンサマー 春日井 長谷川 径子

母と子と老人と犬我と本 银杏降りしく公園に集う
公園のブルーフェンスに突き刺さる櫟カシの落葉インディアンサマー
秋冬の境界線の雨の街 映画「沈まぬ太陽」を観る
里芋がころりと床に転がつてけんちん汁の献立決まる
芋ごぼう大根きのこ木枯しの音を加えて寄せ鍋ぬくし
大甕の底に眠れる濁り酒冷えしを汲みて紅葉愛でたり
氏神の祭の寄付を集めるに若き奥さん詐欺を疑う
校正の視線をはずし色づいた櫨の奥の蒼空を見る
裸木の秀つ枝を過ぎり行く鳥の影のごとくに時の過ぎゆく
篝火の花の名を持つシクラメン紅花を抱き夜を帰りぬ

茅紅葉

豊田 石倉香子

美しき茅紅葉と見えし畑今日は苦闘の復旧作業

茅の根網の目のごと広がりてただ地形のみ畑の形す

鋤先にバツタの群の飛び立てり数多生きおらん茅紅葉に

耕しし畑に蒔かんこの種子はツタンカーメンの紫豌豆

櫟葉の散り敷く丘にまどろみぬ吾も一葉の落葉のごとく

埋もるる落葉と吾の温もりが同化していく櫟の木下に

櫟葉と大地の香と温もりは記憶の世界に導きゆきぬ

積もりいる落葉の山を横切りぬ尻尾の切れたるトカゲ一匹

裸木の所所に鳥の巢の空き巢かかれり晩秋の野に

櫟の木は幾つの秋を数えしかおかめどんぐり拾いて帰る

友
中津川 秋山光雄

目覚めたる深夜の闇に浮びくる癩病む友の今宵のベッド

消えなんとする火を手もて囲うごと祈り切なり癩病む友に

惜しみても余りある友は末期癌ヒゼキヤの神よ憐みたまえ

病む友の額に手を置き讚美歌を静かに歌えり妻と我とは

「われ生くるはキリスト、死ぬるもまた益」と語りし友の別れは近し

主の時を避け得ぬ友に牧師われ今日伝えんか死への備えを

信厚き友にイエスは宣うか「忠なる僕よ、我に帰れ」と

立ち尽す家族、われらに声低く主治医はひと言「臨終です」

遺族らの涙の中に歌いたり「まもなく彼方の流れのそばで」

祈りたる信仰の友ついに逝く窓の景色は変らざれども

ベッドに寄りて

名古屋 林 すみ子

介護用ベッドに眠りゐる夫の、もう歩けざる日々を看取りて

真面目人間なりしに夫の思ひても見ざりし老後の寂しさを見る

ストローで吸へなくなりし口元へ茶さじで注ぐバナラジュースを

眠りゐてふと目をあけし夫に声かけたなりこの人ばあちゃん分かる？

ベッドにて結ばれし手は固定され夫の点滴二十四時間

点滴に命をつなぐ夫の身の辛からむ日々ベッドに寄りて

「父さん」と声かけ息子は父の髭ゆつくりやさしく剃りてゐる

痰のごろごろ鼻から喉から管で取る辛いか夫の目尻に涙

「点滴を外します」と医師は言ふ愕然としてその言葉聞く

何時までの命か呼吸してゐるかベッドに寄りて見守りてゐる

プレリユード
幡豆 木下容子

力なき電話の声音残れども来るなと言えば従うほかなし

掴みがたき父と思えり大正昭和抜けて来たりし太き骨格

はらはらと落つる葉の音聞きながら情緒的発想踏みつけてゆく

月明り夜道にうつすら輝きを落としはじめぬ山は初雪

眠りゆく母の思ひは温からん白き入浴剤湯に溶けゆけば

庭を掃く熊手の先の切れ目よりするりと力抜けゆく

地獄の門つぶさにみつめいる眼は荊棘に咲けるミニチュアローズ

寒き雨過ぎて吹く風春のごとき誕生日なりただひとりなり

二二口ツソのトランペットが似合う部屋運命とは命を運びゆくこと

自らを絞めつけてゆく心もつを老いに至らんプレリユードとす

犬の鼓動 豊田 鈴木 充 江

犬を飼い早くも五年夫と二人犬の話題にほのぼの暮らす
二か月の小熊のごとき柴犬はあの日のままにアルパムの中
初対面のじやれる子犬を抱けざりし少年はわが背丈を越えぬ
檻を齧るやんちゃ盛りは疾うに過ぎ人の六倍老いてゆくなり
首輪をなす合図となりしビスケットひとつ与えて日課の散歩
ぐいぐいと綱をひつばる逞しき犬の鼓動を受け止め歩む
その家の貌のごとくになりし犬互いに引きつりて挨拶交わす
身勝手に可愛がりいる人間のペットにされて幸せなるか
暗闇に視覚・聴覚・臭覚の何が働くゴキブリに吠ゆ
さまざまな犬飼われているこの峽に山は紅葉し季は移ろう

スーパー林道 名古屋 梅村 康 江

ひた走るバスの窓より望み見るスーパー林道紅く燃えたつ
都心より離るるごとにさら澄みてもみぢの色の深みゆくなり
紅葉の向かふに白山望みたり稜線すみて白く横たふ
紅く燃ゆるもみぢの山のかがやきを風なめらかに吹き渡りゆく
四百年経し村上家の梁ふとしこぎりこの館文化財なる
白川郷の茅葺きの屋根に靄たちて紅葉のいろも幽玄にみゆ
八十ヶ所合掌造りの屋根ならぶ人それぞれ心に溶け合ふ
萩町とふ土手に萩の穂ゆれてゐるお食事処の窓辺に佇てば
草の間にためらふさまに咲く野菊うすむらさきが茜に染まる
いつしらにとしをかきかねて忘れきし純粋の白き秋明菊は

興福寺 清須 三浦 しき

晩秋の光のなかを興福寺へ阿修羅に会ひに足早にゆく
大勢の視線のなかの阿修羅ライトを受けて孤独に見ゆる
人の目に触れず過ごし天平の長閑なる日を阿修羅は恋ふる
赤い肌に三面六臂ささへるる阿修羅の瘦身まへにかしげり
天平の仏師の念ひこもりるる表情ことなる阿修羅の三面
べつの顔人も持つゆゑ三面の阿修羅の像を身近におもふ
眉よせる憂ひ表情人に似る時こゝろ阿修羅は少年である
甲冑を身につけ沙羯羅あどけなし武器もたぬ手は浄らに見ゆる
つばさなく鳥の顔もつ迦楼羅像甲冑おもう宙とべぬ
二〇〇九年ヒット商品番付に阿修羅展も載る今朝の新聞

SL汽車 新城 北川 志 奈 子

五千の息子八十三の父連れてSL汽車の仲間となりぬ
若年性痴呆の母を預けて父の喜び息子は受け居る
煙上げSLがトンネルに入りゆけば子等は燥げる声をあげたり
走井は驪で大河となりて来ぬエメラルドの接叺湖に佇む
チンダル湖紅黄褐色影映すしばしの時にころめり
アプト式森林列車は次々と右に左に五彩の色なす
雄大な接叺峡溪谷列車行く乗客はみな感嘆の声
右カール左カールと列車行く過疎の村村無人の駅駅
散り初めの柵葉四、五枚掌に取ればトロッコ列車の人は手を振る
アプト式森林列車はキイキイと音たて登る秋惜しむごと

南京黄櫨

春日井 小松本眞智

三年日記

米沢 松谷忠和

ニユータウンにナンキン黄櫨の並木道百本ほどが両側占める
夜来の雨上がりてナンキン黄櫨の道この日もつとも美しくなる
赤黄色オレンジもある黄櫨もみじひと葉一葉に朝日が透ける
黄櫨もみじ朝日を受けてひと葉ずつ沸き立つごときひかりとなりぬ
朝あさに昨日とちがう風の吹く紅葉もちがう今日の色生す
竹林に逆光で見るとみじ葉の篝火のごと風に揺らぎぬ
キヤリアとかノンキヤリアとか日の当たる桜もみじ葉真っ赤に燃える
赤黄色あふれるなかの緑葉のあとどれくらい晩秋の風
うた作れうた作れとぞデジカメのなかのみみじ葉急ぎ立てくるる
赤ペンで時にはうたを書いてみる添削されたようにはいかぬ

常住寺

伊勢 前村治美

小坊主の人形掲げる道しるべ頭をなでて境内に入る
境内と対峙の城は豊かなる縁纏ひてひとときわ白し
住職は留守の表示の木札掛く「雲隠れしてる」に笑み訪ふ
檀家なき寺は藩への帰属故住職嘆く貧のたつきを
聖天が守り本尊なる故と寺に鳥居の謎を証せし
配膳の大黒実到手際よし精進料理の焼き味噌匂ふ
銀杏の葉拾ふ童に順路問ひ寺へと下る黄落盛ん
電気柵巡らす刈田遠く見ゆ住職嘆く猪の被害を
いのししを撃つ銃声こだまする暗き林に静寂戻る
紅葉越し白鳳城と対峙する眼下に街のいらか日に照る

高天原

名古屋 岡本敏子

小屋前に瘦躯の君を見つれたり水晶池見し眼澄みたる
約束をせしにあらねど遅いねと言はれてうれし待たれぬるか
山間の初冬のひかり集めたる龍昇池に鴨を見てをり
きのふ会ひゆふべ別れし若者とまた会ひ母子のやうに座るも
夢の平は夢のまんまにしておかな時の流れを忘るる時間
川べりに三つ並べる露天風呂ひとつずつ占めし音もしづまる
水平の床なき小屋へ満天の星降る 白檜曾の黒枝を漏れて
しらびその梢くろぐる影絵とし星明りして暮れきらぬ空
消灯ののちの夜闇に明日越ゆるいくつの沢を想ひ眠れず
峠にてかの青年と別れたり若きは更に登りゆくべし

ちから

総社 坪井圭子

夜の嵐

奥州 佐藤恒子

アイラインきりりと目尻に湧くちから高齢者運転講習の朝
眼細く小さくなりしに老いを知る力集めて目を見張るべし
テスト待ついささかの刻裏山に映ゆる紅葉の眼に沁みる
刈田めがけて一直線に下りくる鳥の動体視力はいかに
認知機能検査をせむと老教官「でこのおばあちゃん」と吾を呼ぶ
をかし
二十の絵を鸚鵡返しに復唱す大人八人素直に園児
遠からず「人間ドッグ」に加はらむ痴呆検査の項目一つ
「思ひ出した」などを教へるシニア塾も町に興らむ近き未来に
なにか切羽詰まつたやうなり古文書の教室に通ひ始めし夫は
ゆつくりと生きるちからが大切と皇帝ダリヤ中空を占む

訪日

L A 青山 汀

絵師

名張 葛原郁子

郷愁に衝かれて訪ひたる母の国「幼日探し」に札幌へ飛ぶ
秋の日の開拓村に遺されし札幌停車場がらんと澄めり
五歳にて戻りし東京父の里九段の家は外濠に添ふ
隣り家の巨き楠くすのきと伸び我が家の庭の日照奪ふ
成田より都心へ急ぐ車窓へと光の雖なす東京タワー
訪日の都度に狭まる空の界六本木ヒルズにビルの背くらへ
朝霊園、昼から名古屋へ乗る「のぞみ」流氓の想ひ掻き消す速さ
何事も握手で祝ふ国ならず深く礼して「短歌賞」受く
祝はれし拍手や言葉にときめけり異土を撲つ風、街歌ひきて
訪日のその都度過去へ還るわれ親は亡くとも列島が親

志す道は異なれど時折に今頃どうしてと追蹤して君
絵師君の個展会場に半世紀をタイムスリップ玉手箱開く
思い出はなべて醸し醸されてほろりほろ夕影に顕つ
旧姓の杉森さんと呼ぶ声に半世紀の蛇腹一氣に窄まる
生きていてこそ会いと思ふなり人生まだまだとでも七十四歳
会場に展示されたる風物画絵師はギョロリ目に写生したりしよ
対象を確と感性に写生する温和和尚の絵師である時
絵師君と文芸かじる吾と居て七十代の道おろそかならず
野山にて手折りし花を画布にその花の写生をせがみたる吾
見事なる作品となる野の花々もはや冬ふゆされにも枯ることなし

職場詠とは何か

菊池 裕

今まで厳密に考えたことはなかったのだが職場詠とはいったい何だろうか？ 日常の一齣には違いないのだが、大雑把に云えば、作中主体の舞台設定（状況）のことである。当然のことながら、作者と作中主体は別である。必ずしも作者の現実と同一視する必要もなく、さらに云えば、創作の場においては、主人公の職業選択は自由である。俳優や総理大臣や宇宙飛行士にだってなれる。なればいい。そこにリアルな実相があればなっていると思う。坂井修一の評論集『世界と同じ色の憂鬱』の「自然・われ・国」によれば、短歌の世界では、古来からハレ（非日常）の文芸・技芸であって、明治以降、ハレ（非日常）とケ（日常）の区別がなくなり、短歌は自我を歌うものへと変貌をとげたという。

近は、ケ（日常）を詠うのが主流らしいが、とりわけ職場詠が重要視される訳とは何か。何故、そんなことを突然、思ったかと云えば、本年度の歌壇賞受賞作、長嶋信「真夜中のサーフロー」は、医療の現場を鮮明に描いたことが受賞理由だったからである。ひもとけば、斎藤茂吉や岡井隆を例に出すまでもなく、医者で歌人は、今までもたくさんいた。選考委員の伊藤一彦は、「今の時代、何を歌うかというときに、やはり現場、とくに職業の現場から歌うというのがとても大事だと思う」と。その受賞作から、選考委員が評価した歌を数首引いてみる。

研修医マニユアル容れて内外の白衣の裾が膨れいるなり

しゆくしゆくくとアルコール液を手に散らす
立ち止まるには広い廊下だ

急患の来ぬぬばたまの夜にして当直日誌に
（晴れ）と記せり

サイレンの音が高まる 急患はデイズニ
シーへの抜け道を来る

真夜中のサーフロー挿入 透かし見し静脈
色の夜明けとなりぬ

「白衣の裾の膨れ」や「立ち止まるには広い廊下だ」に注目が集まったようだが、どう

だろうか。むしろ結句が甘い気がしたのだ

が。

「デイズニシーへの抜け道」の情報も効果的ではないと思つた。この一連は、研修医になりたての青年が春から夏へと成長していく姿が描かれている。プロットとしては、かなり練られたものだろう。にもかかわらず、臨場感はなく、独自の発見も少ない。医療現場の最前線というよりは、いささかステロタイプな、常識的な歌が並ぶ。想定内なのだ。私は、最近、あるテレビ番組の取材で若手医師を百人ほどインタビューした。すると意外なエピソードがぞくぞく聞けて吃驚した（ここでは記さないが）。信じられない出来事の方が、より、リアルなことも実感。なので「職場の現場」という観点から見ればこの受賞作は、いかにも弱い。もつと別の評価軸は、なかったのだろうか。職場詠は「前衛短歌の暗黙のルール」に逆らつて、プライベートをもつと露骨に出すべきかもしれない。常識や一般論からはみ出た特別な箇所が面白い。写真家ロバート・キャパ風に云うなら、被写体に迫るためには、もつとブレていい。ちよつとピンボケくらいがリアルなのだ。ハレもケもない私を他者として相対化させた境地で、日常の虚実皮膜に切り込むべきだつたと思う。

作 品



昭和村

美 浜 山本かずゑ

見晴るかす伊勢湾波立つ野間の浜海苔粗朶の立つを二冬見えす
軽症の人らの入院食事後のはなし弾みて家族のごとし
厳しからん師走の風も吹きこぬハウス安らぎて暮らす老いし今尚
八高校歌偲びて歌う渡辺村長マント高下駄蛮力ラ浮かぶ
昭和村巡れば追憶しきりなり共に暮らしし族今はなし
幼子が力いつばい太鼓打つ健気さにしらず涙こぼしぬ
腸をゆさぶる如き和太鼓の力の響きに魅了されたり
勇壮なる和太鼓聞きたる老いる皆気をもらいしや面の明るさ

秋の空へ
名古屋 樋口勝子

飛ぶ鳥にオーイと叫ぶ澄む空へわが声共に消えてゆくなり

千切れたる雲はふたたびつながらず流れてゆけり秋の青空
ゆきまどう季節の中に咲きわむバラ一輪の深き紅
沈黙のビルのいくつを越えて来し風の軌跡が秋の尾を引く
ぎんなんを降りこぼしつ大銀杏秋より冬へひかりはなだる
空想のままでいいのに渡り鳥の一万キロを明かす科学者
真二つに切られ焼かれて食卓の秋刀魚の眼何を見ている
空っぽの心にやがて溢れきて温暖化せるとしゃぶりの雨

妻病む

江 南 武 馬 寛

バランスのあやふき妻を支へつつ三人がかりで入浴させぬ
探せども探せども手は空を切り足無きことを妻は告げきぬ
妻の足左下肢が壊疽えきにして膝下切断手術をされぬ
ベッドより孫ひんに抱かれ車まで妻移動せり足無きままに
長々しき病院の廊下を杖ならし歩みてをりぬ妻を見舞へり
満身の力を出だし幼児は注射に泣けりインフル予防
庭隅にいささむれたる南天は雨のなごりの露を照らせる

供 花

常 滑 角野かず美

十年のとき流れしが甘き香の供花の届きぬ娘の命日に
夫病みて追わるるよう一日過ぐこの現実まことに逃げ道はなし
台風で無残むぜんになりしに花開く皇帝ダリアの命遅し
歌会の講師の先生口悪しお褒め言葉は一つもなくて
惚け来たか刷りおえて違い発見す壊れそうなるワープロにして
いくたびの注意をうけても違えたり申しわけなく頭こちんと

夢のなか母に救いを求めいる笑顔でいても介護は重し
何もかも言うことできぬは辛すぎる娘生きおればとしみじみ思う

妹
白河 斉藤 徳子

南天万年青やぶ柑子赤き実つややかに日に映えて
人工呼吸器つけて胃にも穴あけて言葉もなくて妹は臥す
かろうじてまなこ開ける妹は何告げたきや見守るばかり
湯あみせし妹の肌すべすべとかひなのむくみ少ししまれる
我ら親子三人の顔まじまじとみつめ妹涙流せり
一すじの涙は何を訴うる計りかね居り肉親なれど
誰が置きし枕辺のノートお見舞の友のあつき心根心にしみる

マスクして
蛭川 永治 八重子

娘の家に遊びし幾日大根に白菜抜かなと心急ぎつつ
漸くに大根、蕪抜き終えて明日は漬けなと心安らぐ
今日ひと日悔ゆることなく終りたり湯に浸りつつ雨音をきく
紅葉のいまだ美しき笠置嶺に今朝初雪のうすらに見ゆる
目白きて鴨も来て木守りと残し柿の実啄ばみている
予防接種受くるとゆきし病院に顔覆うばかりの大きマスクす
マスクして受診待つ人多かりき声かけられて友よと気づく
曾孫をこわごわ抱けば心地よき命の温み伝わりてくる

初冬
蛭川 土井 佳子

空気澄み晴れ渡りたる大空を眺め抜きゆく大根太し

賑やかに家族で抜きし大根獲り思い出しつつ一人抜き行く
来年の楽しみ思いチューリップの球根植え終う五十個程を
待望の日曜日には白菜を獲り終え子等は運びてくれぬ
この年も残り少なき師走に入り救急車の音今朝も聞こゆる
毎週の如く出掛けるウォーキングに息子夫婦の健康祈る
今年又三年日記購いて三年先が思いやられる
最愛の夫の看取り終えし友の声何時も同じ声のひびきす

親しき友よ
豊橋 鈴木 千枝

幾年か睦み合いたる友は今急の病に倒れしと聞く
とつとつと妻の病状語る声わが裡占めて眠られずいる
次の逢い約して別れしレストラン皓々として今も明るむ
二人して訪ねし可児の花園にアンネのバラの深紅が揺るる
神殿の前に赫々薪燃え能樂しみし日の蘇える

「前向きに生きましょう」との友の声ほのぼのとして別れしものを
病状がやわらぎ来れば訪ねみん如何なる言葉かけんか迷う

猫の目
白河 穂積 宮子

絵筆捨て画布片付けて今日よりは卓に向いてペンを執るなり
さ庭辺の花を探せば黒土に南天の紅実ホツホツ愛し
寒天の固まりたるを見とどけて固まりかけた手足を伸ばす
雨上がり荒れて谷津田の水量に橋より眺む揺らぐ月影
乳母車に赤ちゃん乗せて入場す甥の結婚式倍の拍手を
医科と齒の記せし曆びつしりと避けては通れぬ師走となりぬ

探せどもチラシの裏の白紙なし師走の売り出し色の鮮やか
目覚むれば髪に手を上げ鏡見る少女のようなそんなひととき

走り根

白河 大谷宣子

庭隅に掃き集められ堆し落葉にも大霜白きかたまり
芝庭に枯葉が一面敷かれおり昨夜の風の強きを知りぬ
身の程を知らぬか七つを実らせて金網に這う郁子の細枝
走り根をいくつも踏みて登りゆき大内宿を一望にする
フィルムフィルムの早回しのごとあの年は父逝き母逝き部屋部屋の広さよ
幼子を育てながら働きぬ娘の起床は四時半と聞く
里の味母の心を届けたくけんちんコロッケ宅配にする

趣きあり

北名古屋 竹田敦子

はらはらと楓紅葉は地に落つる池泉回遊庭園静もる
鳥が鳴く葉擦れの音かすかなり大木樹々に木洩れ陽ゆたか
水鉢や灯籠巧く配置され巡る庭には趣きあふる
飛び石の大臼踏みつつ庭巡る足裏にやさし茶室へと入る
音も無く楓紅葉も池に落つ水の輪生れて鯉近づきぬ
温もりし冬陽を背に嬾動く切り干し大根の白かがやきぬ
夕なれば駐車場に猫が待つ止まりし車に素早くもぐる
居眠りの夫に用事を依頼する言い訳しつつ庭に出て行く

木漏れ陽

尾張 山下聖水

落葉鳴く声を嬉しみにいるらしい鼬が西に東に走る

いつからか居ついた鼬この頃は押しかけベットの貌に居坐る
ときどきはわれを振り向く(いたちどの)「当分居候するからぬ」
いたち語に「いい庭ですぬ」と首を振る「勝手に居つくな」と言い返しやる
誘われて鼬と遊ぶ秋の庭心尽くしの木漏れ陽の下

虫食い短歌クイズ

次の歌の空欄に入る二字で三音の形容詞を考えてみて下さい。
(調べずに考えましょう)

山青く風ぐるりより吹きおりて
しづかさ
□ 澄みゆく湖うみの

前川佐美雄『天平雲』

答えは次号に掲載

作品 Ⅱ

稲沢 玉田 成子

扶桑 間宮佐和子

唐突に大正十四年卒業の父の写真を持ちくれし人あり
速き日の写真なれども色褪せず袴姿の小さきお父さん
ほの暗き蔵の二階のはだか灯が私の箆筒不気味に映す
この箆筒われ生れし時のものと聞く七十余年の想い出語る
古箆筒動きも悪し小引出し小さき包みに名前のありて
六人の母の姉妹に囲まれてわれ三歳の貴重な写真
写真よりいまだ残るは五人なり傘寿を頭に喜寿へと続く

つくば 緒方静子

常緑の木々の間を彩れる遠く近くのくぬぎ葉の景
土気色の蟻螂一びき道の辺に触るれば足をふんばりて立つ
うつうつと心ぐもる日は川沿いの冷たき風に頬を預けん
雨の朝出でゆく夫の重き背にともし灯ほどの声かけをする
玄関に並べる夫と吾の靴片方消ゆる日のあらんこと
後続車なければ速度ダウンして走る枯葉のふりしきる街
一病を持つ兄にして電話の声くぐもる今日の我が胸いたむ

高空に風のあるらし満月の白き夜雲のなか江りゆく
月光は夜更くるほどにまさりゆき天に皓々地にも皓々
椿の葉白銀のごと輝けり一葉一葉に月光乗りて
月光の溜りあるがに蹲踞に満つる手水の底まで明し
獲り終へしキャベツ畑の狼藉に月しらじらと照りて無残や
照る月にとほじろき道どこまでも行かばこの身の透きとほらむか
月あかりさやかにわたる田の上を貨物列車の音つらなりてくる

三重 木場敏子

鎧下に辻が花染みせてをり掛軸の武者装ひ優美
コチニールの染らしとあり赤マントオランダ渡りさぞや高価に
紙衣かと思ひてみれば麻夏着保存よかりし家康着用
婆娑羅なるは太閤さんの陣羽織持ち主わかりさこそと眺む
一目見て清正兜とわかりけり憧るる日ありき昔昔
地球壊す物質作る現在に野木瓜の蔓の籠すまし顔
人家建つ元北山遺跡は先頃の高度成長削りとりしと

岡崎 大塚孝子

材木積むトラックの陰に声のして真昼を男らカード愉しむ
前方に牡丹江站見えくれば若きドライブパー徐行しくるる
海ならぬ鏡泊湖なれど寄する波引く波ありて青の冷たさ
遥かなる中ソ蜜月の時しのばすロシア風別荘湖岸に古りぬ

鏡泊湖の魚を食まむと店先の客ら水槽を覗きつつをり
土壇の上に千年あまり動かざる宮殿の礎石触るれば温し
おほかたは草地となれる渤海の宮址に黄色虎の尾は澄む

岡崎 大和田美奈子

まだ生きてゐるから予約をとりたいと病氣あがりの親しき患者
手作りの野菜ずしりと手渡され治療後の献立頭をよぎる

その母より早く義歯にはならぬよう模型見せつつ説明をなす
後部席にいるわれのもとへ急ぎ来ぬリユウマチを病む患者明るく
信州の嫁の里より届きたるリンゴの詫び状は生産者より
味は良く素人には気付かざりし天候ゆえの被害詫びいる
凍霜害高温害と戦いて育ちきたりしリンゴ手にせり

津島 渡辺信子

幾年振りに二人で訪ねし植物園イロハモミヂの紅に酔ひたり
深山に分け入るごとき心地して秋の世有園寂かに在りぬ
穏やかに白き光を独りじめ皇帝ダリアは空に浮き立つ
紅葉する枝越しに見る長屋門古き時代に引き込まれゆく
スパーに海の色して並びある秋刀魚に「春夫」の詩を思ひをり
時としてぬけ放題の日もありぬ生くる術かもふんはりとして

岡崎 渡辺チエ子

ゆるらかに石碑に流るる筆跡はやまとくにはら唐招提寺に

「おほてらのまろきはしら」と詠む人に会いてみたり静寂の中

廟前を掃き清めいる若き僧の箒目踏まず目礼をなす
薄緑に木木の根元を被う苔山に見しより穏やかである
天平の校倉造り裡深く木組豊かに年月を経ぬ
わが町のミュージアムに立ちし時ありき今北円堂にまみゆる無著像
立像を伽藍に仰ぎ玉眼の深き目差なつかしくあり

名古屋 安井喜代子

池隔つ能の舞台は仄暗く背後の竹林月まかがやく
蠟燭の灯に照らさるる能舞台水面に影を映してゆらぐ
能舞台池庭の木木蠟燭のやわきあかりに陰翳深し
幻の仕舞をながめ笛鼓耳にとどめて舞台に見入る
タクシーにくねくね曲る山道を登り来しゆえ肩凝り激し
暗闇の天城隧道とぼとぼと提灯さぐるは作中の人
川端のするどき眼暗き顔脳裡はなれぬ天城の山越え

名古屋 阿部三男

この分岐曲れば出合う七竈夕陽に映えて谷底紅し
崖崩れ登り下りが行き合えば知己の如くに道ゆずり合う
旅先の秋の一日の老二人バスの窓より富士を眺めぬ
真夜の空十五夜の月赤々と隠す雲なく師走に入りぬ
霧の中細き畦道長く伸び行き交う人なく吾一人のみ
灰色の空に伸びたる鉄塔に届けとばかり大声をあぐ
尾根を行く白草山のその先に木曾の御嶽白帽かむる

名古屋 水野 すみ

足もとに散り来し一葉の鮮かな色彩愛でて桜紅葉掃く

梅擬き桜の紅葉散り果てて次はブルーベリーと待ちぬるわれは

侘助の白きが三つ四つ散りてをり白き姿はやさしきままに

朝一番一面記事を詳細に読む慣ひあり健やかな日は

むづかしき政治経済とびこして生活の欄続けて読まん

遠景に里山めぐる寒天干し冬になれりと冴えたる便り

大方は二人乗り小舟入鹿池の紅葉を背に公魚を釣る

有松 松田 育子

山茶花のうす紅色の広がりにし庭にてオベの決意なしたり

術前の不思議な日々が過ぎゆけり柑橘の色こころに沁みて

「お大事に」なんていわないで つまりその早期発見は恵みであれば

明け方の薄闇に映ゆひんがしの空の色なり朝日が昇る

犬連れて明けの明星かがやくを確かめながらすこやかにゆく

いつしらに群青の空冬雲の凹み作りて冷たき影す

わが植えしパンジーの黄色はなやぎて王者のごときエネジー呉れぬ

枚方 木野 敏

手にあまる大荒れをせし台風はにくまれながら東へのがる

卓かこむ友が数人あつまれば会話のあぢにはなやぎて笑む

喃語をば話す黒衣のカラス奴は悪者みちびく地獄の使者か

沈黙は夜の常なれどマイ・カーが約束破りがなるときあり

アポロンはひがしのそらに赤く出で黒の支配を放逐したり
若き日は勉学のため身をつくし老いたる今ぞ恋に打ち込む
おそろしや闇が魔物を従へて御出で御出でと招きて居るも

岡崎 竜獄 洋子

バンクーバーオリンピックは近づきて木木は倒され路肩に積まる

ウイスキーに続く道路は拡張され山削られて岩肌あらわ

ドライブは道路工事の渋滞にエンジンを止め新聞ひらく

オリンピックは自然破壊と聞きたれど森林伐採をまのあたりにす

交差する歩道のスロープなだらかなり車椅子にも配慮されて

車椅子は広き道路を堂堂と行き交いておりバンクーバーは

晴れし午後楓落葉を踏みしめてバンクーバーの秋を楽しむ

蛭川 田口 まち枝

黄の葉落ちひとつばたこの黒き実が数多なりたりさくらんぼの如

ひとつばたこは三年掛かりて芽が出るとう十粒拾いてポットに撒かん

初冬の野菜畑に蝶が舞う小春日続く温暖化のため

師走来て三年日誌が最後になり惚け防止とて買い求めたり

夕食後三年日誌を読み返し出逢いと別れに胸熱くなる

半世紀書き続けたる思い出は悲喜こもごもに私の宝

三年後は喜寿を迎える健康で日日綴りたい私の願い

蛭川 田口 千春

たかが猫と人は笑えどされど猫悲しみ残し死にてしまえり

愛猫の死を忘れんと洪柿の大木倒す身を酷使して
羽根破れ死に場を探す紋白か我すり抜けて山裾に消ゆ
小魚を大半食みし池の辺にごめんとも言わず青鷺の立つ
夏の日にメロンを盗りし貉いま凍てし夜飢えを如何に過ぐすや
地味好みの人を着付けて見惚れおりこの業持てる喜びを知る
額に掲ぐる猛虎の絵図は吼ゆる如やおら真向い虎年の来る

岩村 鈴木温枝

宵六時三日月の位置南西に受くるを拝す雨多きかと
五感豊かに守られ今日も動けたり尊き事と一日送りぬ
真白な霜に見舞われ霧立ちぬ絵のごと陽差しが広がりにてきぬ
農家にも休耕、転作あまたあり尊い農地の土を愛しむ
上手い事言いゆく人は本心か商いに来る声のやさしく
紅色の八重咲き山茶花ごこり咲き知らず知らずに足運びおり



NPO法人日本詩歌句協会 第4回中部大会
作品募集および大会要項

募集要項 短歌 二首一組千円（何組でも可）

原稿用紙に作品と住所・氏名・電話番号を明記、投稿料同封でお送り下さい。

送り先

〒四六四・〇八二二 名古屋市中種区末盛通一、三、三〇二二

倉地亮子

募集期間 平成二十二年一月十八日～二月十三日

賞 大会賞・各選者賞・愛知県教育委員会賞ほか

選者 青木陽子・大塚寅彦・小塩卓哉・神作光一

倉地亮子・斎藤すみ子・立松滋子・若尾幸子

中部大会 平成二十二年三月二十七日（土）

午後一時から四時（受付十二時半より）

会場 ウィルあいち 大会議室（3F）

地下鉄名城線「市役所」下車二番出口徒歩十分

TEL 052・962・2511

作品 Ⅲ

常滑 中村ひろこ

海と空どんよりとして境見えず吾が身の内も雲で充たさる
華やかな紅葉のトンネルくぐり来て蔵王のお釜の碧水見下ろす
早朝にメールの音して孫誕生の知らせと写真送りきたりぬ
嬰兒の微笑み見るたびに孫抱くことなく逝きし夫を思えり
じわじわと明けつつ朱に染まる空澄みて荘厳あたりを包む
介護者の大声道までひびき来て老い臥す哀しさ此処にも著し

豊田 那須勝美

名古屋 安井恭子

秋空に薄と紅葉の銀と赤対照のよき富士五湖めぐり
太陽光窓一杯に差し込みてグッドタイミングと手を合わせた
バスから見る富士の勇姿は前も左右もトリックのごと歓声上がる
ロープウェイに夜景一望のカチカチ山昔むかしは華やかになる
錦秋の富士五湖めぐりに温もりし檜湯玉の香につつまれぬ
出掛ける時いつものように歩調合わせ明日からは又独自に生くる

名古屋 石井和子

雨の日にエレベーターのドア開くネヴァアーランドの入口ならば
シベリアの祖父舞鶴への引揚げにすれちがいたり祖母行きすぎて
色あせし遠足に着たワンピースせかせかせる我にミシン踏みし義母
柿熟し雑多な島のレストラン車体の下に猫潜みおり

「青い影」 聴かんとするが音のせず開ければCDと一匹の蜘蛛

ゆくりなく同窓会の便りありていそいそと来ぬ修学院離宮
雨上がり離宮のみみじ生き生きと光を深め鮮やかに映ゆ
柿茸（しじり）三つの間繋ぐ濡れ縁に明かり障子の白さ際立つ
かえで葉は今は盛りと若き血の燃え出づるごと山荘を染む
遙かなる山には白き霧たちて見下したれば赤黄鮮やか
楓の池塘鮮やかに映いて水面静かにうつすら紅

津島 滝川松子

教え子の還暦記念のクラス会指折り数え我は待ちたり
教え子のクラス会にて短歌好きの生徒等に与えん合同歌集を
合同歌集持ちてしゆかなクラス会短歌学べる生徒に与えんと
還暦の生徒等の名簿を眺めつつ平成四年の会を想えり
中学生の面影想うクラス会還暦祝う顔のたのもし
百人の教え子と教師七人尾張温泉に集うが嬉し

昼寝より目覚めし我に「お早う」と曾孫ひこのあいさつ可愛かりけり

名古屋 太田 浩子

ミシユランの三ツ星よりもおいしいと子に連れられて暖簾をくぐる

覆面で店格付けせしミシユランの権威断る店主でありぬ

東京のここは「京味」異空間生涯一度の時を味わう

おいしさを伝える術なし殊更に言葉にすれば言葉はすべる

殊更にかくあれかしとは主張せず京焼の器に料理は映えぬ

名人と評判高き「京味」の店主は言えり「道半ばです」

豊田 蟹 尚行

千両は白く豊かな根を持って赤き実の付く基はいずこか

カワセミの飛び行く姿見ておればコバルトブルーの残像残る

馬鈴薯の畑に恵みの秋雨は降りて新芽は勢いを増す

緑陰に腰を下ろせば何処からか金木犀のかおりして来る

ひこばえの田に白鷺は佇みて彫刻のごと微動だにせず

立ち枯れし松にアケビは三十個紫に売れ爆ぜて際立つ

関 竹中みさ緒

裸木に残る渋柿鳥たちに食めよとばかりみごとなる朱

朝食に歯磨き着替え急かし来る朝の時計よやわらかくなれ

十分の五はなぜ二分の一なるや揃いし靴下ひとつもなくに

地鎮祭にジーンズ穿きて若夫婦神妙な顔で無事を折れる

平成のエコ減量の湯につかりアルキメデスの発見もなし

岩村 後藤貴美子

箕に入れし大豆ころころ転がして一粒一粒見分けて選りぬ

畔に引く黒豆パチリと弾け落つ草分け拾う小春日和に

しんなりとなりし大根五十本米糠まぶし漬け込みてゆく

柿の木に止まりし鴉柿一つ飛び立ち際に落としてゆけり

ぎざぎざの羽根をすばめて電柱に何を見下ろす鴉一羽は

なみなみと水をたたえる蒼き湖のさざ波銀に光りてまぶし

常滑 桑山撫子

遠山に入る陽を見つつ疲れたる足を早めて野良より帰る

群雀櫓田に寄り騒がしき風吹きすさぶ冬は来にけり

昔母が作りしごとく味噌汁に酒粕入れて香りたのしむ

今日もまた雨に日暮れて肌寒し皇帝ダリアの花は褪せゆく

見渡すも見返るはても紅葉して信濃の山は日暮れんとする

黒々と焼き尽くされし野火の跡はや萌え出づる杉菜のありて

飛鳥 浅岡宏子

一隅に銀色返す自販機の温冷の雫五感に広がる

杖つくも手押し車を押すことも「慣れるのよ」とぞ媼静かに

五十年過ぐる色なき事務室に南天活けて今年を閉じぬ

自在なり宙にゆれいる皇帝ダリア冬の陽ざしに花びら透きて

街路樹のまあるく刈られ山茶花の花のあかるし目が喜びぬ

鷺一羽欄干に止まり絵のように夕映えのなか川面みており

岡崎 大久保 久子

朽ちてゆくものの華やき満天星に夕陽あふれて輝きやまず
まひてこし柿の葉風に遊びつつその紅の遍路定まる
昨夜の雨さほどつよはあらねどもピンクの侘助重なりて落つ
この木にも知覚のありや植ゑしより六年経ちて花あまた咲く
水仙はその格式を尊べば袴をつけて凜として咲く
夕きりて西へ群れゆく鴉らの時は遠き森であるのか

豊橋 池田 厚子

空すみてアサギマダラの渡る頃インターネットに書き込みの増ゆ
蝶の道は台風の道と重なりて塩害に枯るるフジバカマの花
毒ふくむ花の蜜吸ふアサギマダラ己を毒と化してゆくため
若きころ流行りし香水ボワゾンの意味を意識し遂に使はず
青空をわがものとして鳶一羽輪を描きをり 鯨の上
叫びたき衝動おさへ山頂に秋の酸素をおもひきり吸ふ

飛島 平野 てる子

久し振り雨にうるおう広き畑痛みし身には雨はいらない
一本の山茶花咲きてあかるくも散りたる後の片付け誰が
クリスマスツリー飾りて喜べる曾孫の笑顔に安堵させらる
痛み耐え部屋にこもりて乱れたる林眺めて思いあれこれ
師走をば半ばすぎたり気の焦り身のいたみしに動けぬつらさ

東海 小竹 きぬ

血圧を計りひと日の始まりぬ ねばならぬとは因果なことよ
男子たる立場を堅持するらしき内露地への足揺れて定まらず
日常の場に慣るるとは奇妙なりかくある吾とそれを見る吾
明日のため自転車漕ぎまた歩き頭脳駆使するされど眠れぬ
女孫四人二人は嫁ぐと聞きながら年経しことをししみ思いう
琵琶湖にて遊びプールにて指導せし若き日蘇る老いてはおれぬ

名古屋 廣瀬 俊子

独り住みしふるさとの兄旅に斃れ古き茅葺きの家が残りぬ
突然に逝きし長兄八十五歳充分に生きたりしか否か
亡父の齢越ゆるをのぞみし兄逝きて父に隣りて鴨居に並ぶ
朝毎の果実酒のむをたのしみし兄の作れる梅酒残りぬ
里の庭の水琴窟も蹲踞も全ては古び人影のなし
高層に住み慣れし兄の子どもらに無用なり築百二十年の家

岡崎 喜多喜代 司

草刈りて背負える束の重かりき妻の在所の山茜色
縁有りて結ばれしより六十年偶に来る山懐かしく見る
霜月の夜は更けて来て遠鳴きの雉の声聞き眠らんとせり
弟が造り置きたる果実酒を亡き人偲びて妻と嗜む
猪が三匹子を連れ走り行くこんな景色がまだ残れるか
山の水引きて湛えし小池にて餌くれるかと真鯉顔出す

名古屋 加藤友利

尉鷄金柑の枝を飛び渡りカタカタ鳴らして冬支度せかす
朝の事故ドクターカーにつれられて新幹線はゆつくりすすむ
時雨やみ雲切れ渡る伊豆の山冬の朝の輝く光
車のせ金城埠頭の船はゆくいずこの国へどここの港へ
時雨ふる庄内川の白さが一本足で魚まつ師走
大公孫樹は木枯し吹きて葉の落ちぬ枝も切られて寒さを生きる
人間とはなにかを語る先人は貧は文明を生むとぞ答う

安城 稲熊千代子

全身が耳となりゆく夜の闇階下の物音風うなる音
紅葉せる木々明るきに風知草霜枯れしさ見せて移ろう
哀愁の旋律なつかし金銀の二人いずこへ(月の砂漠)に
暖冬の日本に慣れし生熊かジャスミンの蔓日毎に伸びて
脱ぎ捨てる夫追いつつ片付けて連絡事項伝える日課

大垣 井上清一

トンネルを出ずれば全山紅葉なる山迫りきてトンネルに入る
木々なべてあかく染まれる山肌切なく見ゆるはんのきの青
妻のほか誰もかけこぬ携帯電話ポケットに入れ畑の草とる
陰日向しるく分かるる霜月の日陰の畑になすを抜き取る
微妙なる距離たもちつお互いに馴染ぬ猫が居間に居眠る
夕陽背に家路たどれば東の空の中ほど白き月見ゆ

高山 上牧右田子

人に逢う想いの如くきておりぬ福寿草咲く二ヶ月の庭
催花雨という語に心預けたり来る日くる日も雨の続きて
宿に聞くあかとき告ぐる寺の鐘聞きたる記憶の中に微睡む
石段を踏みしめながら昇るときわが手に縋りし母を思うも
降りてくる春の日眩し紫の花面を伏せてすみれ草咲く
身をいとえと母の如くに言う義姉に心温もり受話器を置きぬ

蟹江 羽根日出子

山茶花の花びら散らす吹き返し風花ならむ昼間の窓に
夕映えの煌く尾花ひと群に月も見惚れん白波の舞
インフラの現場に向う重機五機きしみて進むは戦車のごとし
夕やけに車倉にもどる重機らは鎌首うずめて闇に消えゆく
落葉まう笑顔の集う足湯場をながめて巡る町の散歩バス
北風とたわむる落葉追いつつに捜す力士の足跡ロード

有松 橋本倫子

「ラ・ノビア」旋律はしかと頭にありて耳をはげましCDを聴く
ささやかな楽しみ奪いし聴覚よ「G線上のアリア」聴きたし
掃き溜めの鶴も老いたり「スベニール」学芸会に踊りし少女
「オーソレミオ」「あれも見よ」とふざけいし何の苦悩もたざりし頃
黄泉よりの交信であれとふと希う「青きドナウ」の着メロ鳴れば
「サイレントナイト」の響きもかき消され虚飾の街に騒ぐ群衆

飛鳥 服部 好子

ふろふきを黙々と食う孫がいてふうふう曾孫も同じ顔する
晝闇に干し大根のほの明かり報恩講への凍てしるき道
当番のお待夜勤める我が家に集う人らの世代変りぬ
収穫を目の前にして盗られたる蜜柑芳う礼肥置きて
時折はメディアは高値報ずれど野菜の売値昔と変らぬ
儉約を旨と生ききし老い人ら浪費をせよと給付金受く
椋鳥の群れが大きく伸び縮み投網のごとく田に沈みたり

多治見 坪内 悦子

秋桜咲く公園を散歩して小春日和を孫と楽しむ
ふと見れば土手の日溜り点々と風が持ちくる白き枯れ尾花
若き等と時には心違えども子に従いて平安に過ぐ
色紙で孫と遊べり兎折る指先見事もうすぐ五歳
幼稚園でも折つてるよ次次に奴や風船笑顔が素敵
最近には白内障の我が手先思うにはまかせず孫が手助け

蟹江 惠利 菊江

時無しに鶏鳴きいる冬の畑大根抜けば冷たさ覚ゆ
月残し朝の日あびる尾根瓦雀賑はひ温もりてをり
畔を焼く枯れ草煙る渦の立つ離れる吾に白けむり追ふ
道隔つ家にブレイキの音の過ぐ夫待つ居間の時計眺めり
立ち並ぶ穂繁ふんは枯れ芒風に穂振りて種子を飛ばさむ

飛鳥 鈴木 まさ子

日向へと移りながらに歌書きぬ辞書の重さが腕に堪える
出産の娘にあれこれと嫁出掛け見送る吾は無事を願えり
突然の友の手術に「どうして」と問う人もなく動けずにいる
報恩講御堂揺るがす読経のなか現世離れて親鸞様を
年毎に欠礼の詫び状増してゆく困らせぬよう吾も準備を
季外れの斑入りの椿咲く初冬亡夫の形見ぞ一言をか

岩村 林 千代花

裏山の柿の葉美しく紅葉して静止せしまま夕陽を返す
大根菜ぎゅつと握りて帰り来し孫の温もり紙に残れり
霧深く真つ白な道を進む今朝ひらけし景は新しく見ゆ
封緘をせしか否かを迷う時手紙は既にポストを滑る
また一軒向かいの家は無人となり古き家具等運び出されぬ
「青空のきわにひとつの白い雲」その墓石の下納骨終えぬ

岩村 服部 美恵子

今になつて核密約の疑いか終戦の夏俄かに浮かぶ
人混みの慌しさもまた良しと師走の大須観音さんへ
輕鳴に鶴鴛アオサギ鶉の集う土岐川見つむる人みな温し
屋中はシクラメンの鉢庭に置き夜仕舞うなり師走となりて
暗き世に花屋の水仙いち早く健気に咲くを暫く眺む
水仙を選ぶ店先この鉢もあの鉢もよしとひととき迷う

蛭川 小林 聡子

ホツカイロ吾にくれたる娘の温み背に明けの明星の下出勤せん
吾を描きし絵手紙曆届きたり師のやさしさに感激ひとしお
幸せに今年暮るるを安堵しつつ運勢気にして新曆を見る
剪定の素質のありと自惚れて枝落したりさても見事に
剪定を終えし梅の木に届かざる一枝のこれり梯子の先に
一枝を切らんと梯子の上に立ち背のびすれども届くことなし

飛島 平野 昌子

天つ光隅なく浴びて聳えたつ岐阜城めざして登る秋の日
信長もかつて天下を臨みたる岐阜城に佇てば濃尾の広野
のどけしや天守に眺むる岐阜の街貫ぬき流るる長良川見ゆ
秋の陽にロープウェイは歓声をのせてしすしす金華山ゆく
白扇持ち八十路の友は凜と舞ふスポットライトは雄姿照らせり
今宵こそ賀状書かむと墨すれど届きし歌誌を読みて過せり

蟹江 日馬 真代

舞い散りし紅き桜葉かさこそと踏みゆく今日の足取り軽し
庭隅に葉の散り果てし熟れ柿と色深めたる橙の黄色
散り積もる公孫樹葉のなか潜らせし手にあたたかし神木の幸
さまざまに輝き反す花の彩鮮やかなるはポインセチアの紅
風花の白き舞見て行く路地に風呂落としたる柚子の匂いす
離れ住む子らと集いし篠島へ寄せ来る波と寝息の安らぎ

蛭川 岩畔 勝子

夜気が冷え明日の予報も冷たきに夫と親しむ読書のひと時
貫きし和牛と人のかかわりを描き続けし会場めぐる
夕時雨通りすがりの山茶花は白き花揺らし晩秋を告ぐ
唐突に息子が来たと夫の言う小遣いおいてほんの一時
休日にテレビが報じる寒桜薄紅色ののどけきぬくもり
歌つくれど素養なき身の悲しさよ地道に続けんと我を励ます

境港 中井 虎尾

カーテンを開けつつ今日の空仰ぐ西王母咲き明るさ増しぬ
過疎線のまじしきなれど日に幾度鐵路を走る〈鬼太郎〉列車
捨て置かれし自転車迎えのなきままに晩秋の雨にぬれ光りいる
冬に咲く枇杷がひっそり咲き支度しているわが庭寒の雨降る
〈大山〉を仰ぎて五里のわが町の浜辺はゆつたり波打ちている

安城 中野 尚子

人もまた紅葉し土に散りゆくを思えば風鳴るとき耳鳴り
山茶花の咲き溢れいる無人駅妊婦ひとりを降ろす日溜り
高木の尖りにあるやエネルギーメタセコイアの種の力みつ
山坂を来れば渥美路山の上の秋の風車のゆつたり回る
喪失の胸乳かばいて黙している友の背流す紅葉の宿

飛島 村上美枝子

肩すくめ焚き火を囲む農夫らの甲高き声何を語るや
赤黄の衣を脱ぎし裸木よゆつくり休めつぎの春まで
お正月の飾りに一枝添えなんと袋かぶせる南天の実に
朝の空冷たきまでに青く澄み飛行雲二つ並行たもつ
遣り遂げし満足感にひたりつつ帰りの自転車ペダルの軽し
老の身に鞭打ち励む仕舞なり僅かな残り火燃え尽きるまで
水溜りよけて遊べる鶴鴿ら尾先ふりつつ稲の切り株に

刈谷 竹内佐永子

この秋の最初のこたつ遠い日の記憶が焦げた匂い立ちくる
インフルエンザ恐れる父は「除菌 除菌」とスプレーしまくり病にかかりぬ
月光の浸みて今にも蠢きそう壊れたままのマッサージチェア
この宵のジントニツクはやさしすぎ酔えないけれど君と笑おう
冷えきった空の粒子を散らすようジェット機の音夜に響きて

多治見 吉橋信夫

締切りも年の瀬も早迫りきて心騒げり短歌に寄せて
清水の舞台に管主の大筆を揮い一気に「新」の一字
「新」の字の我が街にあり橋上の駅開業より一月過ぎぬ
定光寺の展望茶屋に五平餅食みつつ眺む名古屋市街を
紅葉の真盛りなる境内に一際たかき銀杏陽に映ゆ

津島 滝川久子

静もれる昼下がりなる十二月 暮の迫りて何やら忙し
ひとり居の窓辺に坐る飼ひ猫は日差し移れば位置を替へたり
夕空に蜻蛉の群れて上下せり切株のこる田んぼの上に
黄葉のいちやうの木々は寒々と立ちて登校の子らは黙せり
裸木となりしいちやうの淋しさに学校帰りの子ら走りゆく
極月の小庭に立ちて眺めおり枯れず育たず黙せるみどりを

蟹江 寺西津子

義仲の暮の後方ハイウエー世の変遷を知るは天のみ
合戦の火伏せ果しし老公孫樹いまは弱りて樹医に委ねる
端反り鍋齋の味噌汁たつぷりと気取りなき味おふくろの味
齋知らず鐘に人らの集まりてお勝手当番気を抜く間なし
老公孫樹弱りて少なくなりし実を報恩講の齋に饗する
春彼岸つくし御飯で始まりて報恩講は銀杏入れる

一色 山本愛子

あなたには笑顔が似合うと送り出す母なる私の願ひにあれば
嫁ぎゆき空になりたる下駄箱に残されている赤いぼつくり
大き瞳は少女の面影残しいて身籠りしこと唐突に告ぐ
離り住む子らの生計を思いつつ黙して向うふたりの夕餉
木枯らしに耐ゆるがごとく裸木のメタセコイアの枝は尖れり
とりどりのいろに散りゆく谷川に落葉はしばし群舞を見せぬ

蟹 江 谷 口 ミドリ

五線紙の黒い音符を音にする小さき指に力与えよ
楽譜からころがり落ちるような音 孫弾くギターポロポロポロリ
孫の弾くギターにあわせ首をふる 一曲終り肩かるくなる
闘病の友より届きしカボスには送ること出来うれしと手紙
懐かしい顔がだんだんのぼりくる半蔵門の一番出口
友をよぶ大声ピルにこたまする「ケイチちゃんルリちゃん」吾だけの街

岡 崎 渡 辺 静 子

車窓より近江富士を見て過ぐれば遠き日の思い蘇りたり
若き日に友と登りし近江富士なつかしみつつ心戻せり
古里の晩秋胸にきざみつつ刈田続くを車窓に見て過ぐ
水浅く澄みて流るる川面染め数多のもみじ生命終りぬ
川の中色なすもみじ重なりて流るる水を赤く染めゆく
庭の柚子うかべて浸る浴槽に見も心をもほぐせる夕べ

蟹 江 服 部 小 夜 子

街路樹の銀杏あまた届きたり早朝に拾ふ友たのもしき
新米のぎんなん御飯炊きをりぬ部屋いっぱいに秋ひろがりぬ
風邪薬胃薬マスク持たせりと子は中国へ発ちてゆきたり
外つ国に指揮者せる子よ眠れしか上手く出来しか案じゐる日々
看る夫も看らるる吾も苦痛なり老老介護忍耐あるのみ
リハビリは歩くことなり気分よき今日は二千歩夫の付き添ふ

有 松 内 藤 一 義

秋冷が絵の具持ち来てわが狭庭みかん・柚子・柿いろとりどりに
あかときのしじまを破り鴨ら庭の熟柿にあまた群がる
路地行けば葉のみな落ちし木の末に西日に映えて柿の実ひとつ
もみじばが枯葉となりて舞う狭庭過ぎし一生を重ね眺むる
狭庭にて独り黙して草引けばしじまを破る落葉舞う音

蟹 江 坂 手 淳 子

自転車に落暉まばゆき野道ゆくわたしの背も輝きおらむ
篝火と名のふさわしきシクラメン冷雨うけつつ紅く耀う
クリスマス会終えて見上げるタワーズライツ高齢仲間の恒例行事
イルミネーションLEDの白と青銀河の渡るごとく清しき
国内は海外いかかと膝病むにカラフル旅行紙つきつき届く
腰痛をこらえて作る節料理集ううからの笑顔見たくて



前月歌評

I 紀水章生

大とかげ夜更けになつて現はるる夜のカー
テンの皺を楽しむ 稲葉 京子

大とかげ?と思ひながら読むと、カーテンの皺。ふつと力が抜けて、その後じんわり温かくなりました。トカゲと言えば、思い出すのは青年海外協力隊でタイ北部へ行った方のお話。夜中に家の近くに来て「トッケイトツケイ」と鳴く動物がいる。何だろうと思つて聞くとその辺にいる大トカゲだそう。この大トカゲ：現地ではなかなか親しまれてるようです。でも異国に行かなくても自分次第でそんな気分を味わえそうです。

ご近所の差配に施設へゆくひとの庭の椿に
つばみ来てをり 杉本 容子

この赤き蕾はきつとこの方の出立に華やぎ
を添えるために現れたものなのでしょう。

雪原をはしるシベリヤ鉄道のように聞こえ
る釜の湯の音 佐野 美恵

一連では他の歌もあつて茶の湯の情景がき
め細やかに描かれています。しかし、もしこ
の一首が一首だけであつたとしたら、一連の

中にある以上に鮮烈な印象を与えるでしょ
う。

年代を経たる神棚磨きたり古木は古木のま
まに香りぬ 村井佐枝子

時間が流れても変わらぬものをとらえ、丁
寧に表現されているところに好感しました。

沈黙でつながる二人こんなにも人の溢れる
境内にいて 大澤 澄子

その沈黙がただの沈黙ではなく、その沈黙
によつてつながる二人とされたこと。そのこ
とも、その表現にも強く惹かれました。

キーボード押し続けるし猫がQのあふれる
画面をのこす 大沢 優子

猫とキーボードとQとの取り合わせを面白
く感じました。同時に猫に対する愛情も。Q
の文字自体、尻尾のある小動物のようにも見
えることがあります。それがこの情景によく
似合っています。第三句は「○○猫が」?

少年のころさまよふ夕暮れに無花果色を
とますサーカス 大沢 優子

後半の四首には惹かれましたが、中でもこ
の歌の醸す叙情性には特に惹かれました。

吹き消してらふそく抜かれゆくときの穴し
づかなりホールケーキに 近藤寿美子

その存在がなくなつた跡をとらえることに
より、強く感じられたりはつきりと見えてき

たりするものがあります。今そこにあつたは
ずの大切なもの―大切なひと、大切な時間。

東京に木枯らし一号吹く夜を子のマンショ
ンに飲むローズティー 吉田 光子

吉田さんの作品には注目してきましたが、
作風が少し変化しているのでしょうか。強い
調子、堅い印象の漢字も使われるようになつ
てきているようです。この作品、切なさが下
句のローズの色に美しく染まる印象です。

合併はリストラではないさらさらと言の葉
ながれる薄き唇 大橋美知子

どんなふうにも美しく言葉を飾つたとしても
実際のところはリストラなのだ。批判の心情
も含め、よく伝わる作品で惹かれました。

行列のキャッシュコーナー頭上には銀のコ
インの鱗雲浮く 長谷川径子

実景なのにどこか現実離れたようなユー
モラスな風景。そのシーンを切り取つて、読
者もいっしょに楽しませてもらえます。

ふるさとの兼六園の花吹雪 僕死んじやつ
たのに誰も知らない 大屋 邦子

兼六園の花吹雪は美しいものだったので
しょう。切ない歌です。こうして歌にするこ
とで、祈りが天に通じて欲しいと思えます。

前月歌評

II 村井佐枝子

菊池裕氏プロデュースの正月三日特番NHK・BS1『核なき世界へオバマの戦略』をみた。現在の日本が抱える問題を提示した、見ごたえのある番組であった。今月号の中から「核」関連を詠んだ作品をみてみよう。

たはむれに宇宙で鰐を握る無為などは別にこの無重力 菊池 裕

人工衛星で今、長期滞在中の野口聡一を詠んだ一首。宇宙で鰐を握る近未来が在るかも知れない。無重力感は、宇宙船の中のみならず、地球上にも漂う。今日的な捉え方。

核をもち核の恐怖に支配さるる二十一世紀の夏を生きぬる 加藤 嘉昭

真正面から核を詠んだ作品。「夏を生きぬる」とシンブルであるが命の重さが伝わる。核兵器も化学兵器も持たぬ国日本に住みて人を恐るる 樋口 勝子

一見平和な日本でありながら、無差別に人を傷つけ殺める社会の人の恐怖を歌にした。病んだ人を生む国の責任はどうなのだろう。一日に満たぬ時の間訪れてタラップ駆くる

オバマのそびら 千村 一子

アジア訪問の一端として、短時間だけ日本に寄ったオバマ。事情があつたにせよ、タラップを駆け上がる背中のみが印象と云う。

操縦桿に下げてと特攻の若ものに贈りし人形何処に果てしや 桜井 幸子

戦時中の女学生達は、人形を作つて特攻の若者に贈つた。操縦桿に下げられた人形を思いながら、若かつた特攻隊員の運命を思う。

すがひすがひ勢ひを増す鞆に空を掏ひつて地平払ひつ 水上 令夫

大和言葉の美しさを伝達させる作者。「すがひ」は次ふの連用形で、相並んでこぐプラシンの意。ヒ音のリフレインが鞆の揺れによく照応している。下旬の動きが佳い。

けふひと日無為に過ぎしとは思はざり夜半に咲きぬる薔薇に手触れぬ 坪内と志子

年齢に相応う日常生活もあると思うが、高齢の作者にも夜目を美しく咲く薔薇に手触れ、一日の充実感を得た喜びが読者にも伝わ

る。修復に横たへられし仁王像の眼にうつる上弦の月 鈴木 寛子

ユニークな着想の仁王像の連作。この一首は下旬が幻想的である。大塚代表のへ倒され

て運ばるるとき天心をはじめて見たるレーニ

ンの像》が下敷きにあるのだろうか。

一つ違えばすべてが狂うしがらみに定まる数字の置き場所探す 森 治子

時を忘れ数独パズルに嵌つている作者。「一つ違えばすべてが狂う」ことは、人生にも通ずるので、冷静に置き場所を探している。

名優の身を削ぐ演技極めゆく姿か凛と葉を落しゆく 額 典子

銀杏の連作で、葉を落とす姿を「名優が身を削ぐ演技」とたとえた処が新鮮である。屹立と聳える冬の銀杏が印象的な一首である。屹

葉の落ちてあからさまなる樹は闇を寄せつけずして月は手のなか 人見 邦子

冬の裸木が月を寄せ付け闇を拒む。心象的に美しく凛とした月の歌である。

他にも印象深い佳品が多くみられた。

木のベンチに招かれ客となりあるに小さいお母さん神妙な御挨拶 土川 誠子

そら豆の形に似たる赤き靴ふみ出す足のまだ十センチ 宮里 勝子

風のなき初冬の朝むこうまで大河の底のありありと見ゆ 左山 遼

いつしかに便の減りたる空港の管制塔は凜と立ちをり 磯村 政乃

前月歌評

III 大澤澄子

巻かれたる曆伸ばせば絵の虎のあくびする
が見えし安寧 中山 哲也

日記帳の曆の数字は思い出に添い寝するや
に見えなくもなし 同

読んで楽しい表現を心がける作者です。お
もしろいと言うのは意外に難しいですが、伝
達力が確かで、読者の微笑を誘う所に力を感
じます。

切支丹灯籠一基夏草のなかに埋もれて処刑
地の寺 小松本眞智

殉教者顕彰の碑はツブラジイ・クロガネモ
チの木の陰に建つ 同

世界には今も信仰や思想ゆえの戦いがある
事が思われます。二首は情景を述べる事で十
分に読者に訴えかけて来るものがあります。

「円ら椎」のカタカナ表記が生きています。
はるかな日心を寄せし人病むを人づてに聞
く秋の夕べに 渡辺 信子

上句から告げなかつた淡い恋、だつた様にも
思われず。日常の中で、動く心を捉えて。

山頂に朝日仄かに射し込みて中津を抱く恵

那山の紺 秋山 光雄

景色の描写に作者の目のフィルターを通さ
れて、色合いや光の加減までが美しい。

黄金なす稲田に一筋赤き帯締めたるごとく
曼珠沙華咲く 石倉 香子

農に携わる人の黄金なす稲田は、重さがあ
り曼珠沙華の愛らしさにも気付かされます。

文字あるは踏むなと言ひし父なりき畳の上
の新聞たたむ 坂手 淳子

衣更えは人より早くと父言いき勤めはじめ
し頃の春の日 同

一首目の父の躰け、二首目の細やかな気配
り、この二首で父なる人の懐かしい像が結ば
れます。上句に父の言葉を配し作者の中で教
えが生きて力になつてゐる事が推察されま
す。

廃船はまちかななるべし檻樓船に一蓮托生松
花江に浮く 大塚 孝子

いくそたび引き絞られし弓なるか阿骨打の
背がしかと負ひたる スカグリ 同

中国、松花江への旅行詠一連、阿骨打即ち
(金国を建て皇帝となつた) 武元帝の姿を含
め、読み応えがありました。報告に終わらな
いのは、作者の思いを通して言葉にされてい
る所だと思ひます。

「木洩れ日の道」ゆく無言の夫と吾 野菊

かすかに匂いくるなり 松田 育子

野菊の匂いが下句に置かれて、無言の二人
の間に優しさが感じられました。

いつ見ても灯る五階の窓のあり眠れぬ人か
眠らぬ人か 仙田まゆみ

言葉の使い方と着想に魅力を感じます。こ
の階をいつも見ている作者も又、夜更かし。

眠れない人なのでしょうか？
後はもう眠ることのみ残りしか我が仕立て
て我が入る柚子湯 横井 芳夫

ひとりになりたい時もあれば一人が淋し過
ぎる時もあります。所在なさや淋しさを直接
言わず、行動の具体性が生かされた歌です。

かなしみはいかりいかりはかなしみぞ さ
れば悲憤とふ言の葉ありて 玉田 成子
謡曲、壇ノ浦の戦で入水した平知盛の歌に
続く一首です。仮名ばかりの表記には、思い
がけない引力があります。「哀しみはいつか
しづかな安らぎに古き写真のいる薄るがに」
とも詠われて深く、哀しみと怒りについて私
も一度考えてみたくなりました。

クレーン車の高だかと吊る鋼材が澄む青空
をのつそりと這ふ 梅村 康江

よく晴れた日の工事現場、慎重に動かされ
ている鋼材を擬人化したところが楽しい。

前月歌評

IV 長谷川径子

おぼろげな夢を見てゐるやうでした山のむかしを語る郭公
紀水 章生
起きて見る夢は儚し白雲に卵を抱くかたちを残す
同

山深き自然を背景にした心象詠だろうか。霧の道を辿っていくような感覚の一連である。一首目の「郭公」二首目の「白雲に卵を抱く」が夢に響きあっている。

朝光の剥片のごとき葉あり「枕草子」の冬のくぐりに
中畑 智江
せしこともせざりしことも美しく灯りて折りぬ旧き手帳に
同

「朝光の剥片」の上質で雅な比喩が枕草子の冬のくぐりにまことふさわしい。「せざりしことも灯りておりぬ」せざりしことの灯りは旧き手帳にいつまでも灯りつづけるだろう。読み返すほどに立ちあがってくる佳作と思う。

結婚と恋は別なり割り切れと見合い結婚そ
石井 美雄
んな時代で
共に住み心の共有出来ぬかと溶け合うきつ

かけも求めてみるも
一首目の連句として二首目がつづくような結句を完了形にしないところにおもしろ味がついている。

新聞に載り来し歌壇のスクラップ綴ぢし日遙か褪せて出てきぬ
平野 昌子
午後よりは古文書講座与えられし時を居眠りしてはをられぬ
同

新聞歌壇を切り抜き、古文書講座に学ぶ意欲的な日々をお過ごし作者。新年に力の漲る歌を読ませていただいた。謝謝。

店頭の後云々とう書籍目には留まるもとらず立ち去る
山村 博保
共感のもてる歌である。巷に溢れる老後情報。気にしないわけではないが、手にとらな
い作者の矜持が清々しい。

秋冷の独り暮しのわが部屋に温もり連れて日脚伸び来ぬ
内藤 一義
独り暮しの部屋に冬の日は長く射し込み温かさも連れて来た。風が窓を叩き、雨が屋根を濡らし独りの庵もまた良いものである。

新しき年迎えなば励まんと言用ノート求めて帰る
坪内 悦子
新年を迎え前向きな歌である。いっぱい歌が詠めそうである。歌人全員へのエールにも

思える。今年の元気をいただいた。
ロングヘア和服に靴をかるやかに目で追う
女は雑踏に消ゆ
羽根日出子
和服に靴を履きかろやかに歩く女性の生きいきとした姿が目につかぶ。伝統に新しさを加味したファッションは、短歌のスタイルにも通じるものがあるだろう。伝統を踏まえ、かつ新しい試みの歌のような。

マイカ祭落葉舞う朝古本市は収益寄付地で味なれど好き
岩畔 勝子
古本市を巡るたのしみに収益が寄付されるとなると愉しみも倍加される。「好き」というストレートな結句が若々しい。

いつの日も励ましくるる幼馴染われのアレルギーを「それしきのこと」 服部美恵子
良き幼馴染をおもちで幸せなことである。アレルギーを明るく一掃してくれた。「それしきのこと」のいい切りが効いている。

日焼けせし夫は晩酌のみながら声出す方が前だと笑う
後藤貴美子
古希過ぎて夫が初めて持つ名刺営業会社専務とありぬ

日焼けして農業に精進されているご主人の様子が歌われている。一日働いた後の晩酌は至福の一杯であろう。

個への回帰

川田 茂

朝日《歌壇・俳壇》欄の『歌壇時評』では田中槐が「『ゼロ世代』何が見える」（二〇〇九年十二月二十一日掲載）と題して、昨年の歌壇を降り返っている。ここで田中は、優れた評論の多く出た年であったと述べ、「ただでさえ最近では、前衛短歌運動やニューウエーブ短歌のように、ひとつのまとまった思潮や運動が短歌界全体を巻き込んで展開されるのがなくなった。二〇〇九年といえは最初の十年が過ぎたことになる。いわゆる『ゼロ年代』という括りで現代短歌を見たとき、何が見えるのか」と問い掛け、「時の流れは速くなる一方だが、一年ではなく十年という幅のある括りで見たとき、現代短歌はどう変わったのか。そこには堅牢な建築物は見え、瀟洒なおブジェが見えるだけかもしれない。それらを俯瞰的に眺め、検証し直すところこそ、今必要なことなのではないだろうか」と述べている。このように現在は歌壇全体を一点からの遠近法ではなく、鳥のような動く視点を持つて俯瞰的に見る必要がある

のだろう。田中はまた同時に、二〇〇〇年からの十年と、「その前の十年とはあきらかに違うものが見えるのはたしかだ」とも記してはいるものの、「共通する時代の空気感」への指摘をされても、それが具体的に何を指しているのか明解に示されていないところに根拠が残る。漠然とした歌壇の動きはあるものの、それぞれの作品が共振しない状況は、作品そのものから時代の共通項を読み説く難しさを示唆しているかのようだ。結社も昔のように強い牽引力を持ち得るのは難しいし、ジャーナリズムも大きな指針を打ち出し辛い状況といえよう。不況とは言いがら多くの歌書の出版も続いており、個々の活動は決して衰えてはいない。前述の「朝日《歌壇・俳壇》」欄には歌誌「アララギ」最後の発行人だった、小市巳世司の逝去が伝えられているが、同じく昨年末は、長らく「現代短歌雁」を発行編集した雁書館社主、富士田元彦の訃報も伝えられた。春日井前主幹を含めさかのぼること、ここ五、六年の間に歌壇は戦後短歌を牽引した歌人、編集者をつぎつぎと亡くしたことになる。世間では、格差社会の問題が取り沙汰されているものの、歌壇はこの

ところ平均化し、おおきな起伏を見せることのない状態が続いている。

現在は大きな才能、指導者に頼る時代ではなく、個々が様々の情報を精査し進んでゆく時代に変遷したと言えるのかも知れない。それだけ個人の力が以前に比べ試される時代もあるまい。歌壇のヒエラルキーが近いうちに全て消滅することは考えにくい、この三角構造も平板化の一途を辿るように思われる。

今後、歌人ひとりひとりの関わりも変化してゆくだろうが、どのような姿勢で歌作を続けるか、じっくりと考える時が来ていると言えるのではあるまいか。難しく考え過ぎることではないだろうが、廻りに振り回されることなく個々にかえってみることも必要であろう。結局のところ制作は一人きりの作業にすぎない。そんな原点に戻ってみることも悪いことではあるまい。大きな歌人の磁力、結社の磁力、ジャーナリズムの磁力がそれぞれに弱まっている現在、個々の磁力をそれなりに上げるチャンスと見るなら、また異なった歌壇状況も生まれよう。混沌とした現代において明確な指針を見つけることの基盤とした

生のうた死のうた

石井美雄

当短歌会に入会してまだ二年に満たない。

きつかけは母の死であった。その虚しさを避けず正面から対峙したいと思つた時、言葉と並べていた。そして大塚教室との出会いがあつたが、母の死を引き摺つてか今だに自身自身に拘つた内容に終始している。自分の狭量さに悩む。

会社を辞して徒然なる日々、今や時のみが残された資産となつた。その時なるものを考へてみるに、それは「処」、「事柄」と「人」とで構成されているように思う。殆んどの男性の場合、処は会社、事は社内業務であり、人とは社内交流である。それらを総て今私は失つた。女性の場合は多くは家庭、家事であり、夫、子供であろう。行動範囲は限られている。それだけに夫との係りがその女性の人生を大きく左右する。只時と共に変化はあるものの、余程でない限り断絶はない。

男女各々事情は異にするが、我々がこの世に生れ出することは稀有なことであり二度とない。残された時を一瞬なりとも無駄にしたくない。生き続ける今こそ二世を生きたいと思つている。

思つている。

先日、とある書店で佐伯裕子の『生のうた死のうた』を手にした。題名に惹かれた。紹介したくなつた。

死の側より照明せむことにかがやきてひたくれなるの生ならずやも 齋藤 史

生きている不思議、いま生きていて「ここ」こそが総てであると言いつついる。

かささぐるものこそ何と問はるればただかささぐるものと答えむ 岡本かの子

ただ掻き探りつつ生きて来た。人一倍男性の愛情を欲する多感な女の子が生命のままに宥されて生きることを掻き探ると言つてゐる。

いかにせん思ふもつらし恋ふもうしさとて人の忘れぬに 樋口一葉

凍りついた炎のような恋の情念、募る気持ちを絶とうとする。耐え忍ぶという従来女性の断念の姿はない。

四月七日午後の日広くまぶしかりゆれゆく如くゆれくる如し 窪田空穂

当時の空穂は自身を弱者といつてゐるが、こまやかに自分を見つめている息づかいが正確に律動しているように思う。

光放つ神に守られもろともにあはれひつこの息を息づく 茂吉、ふさ子

齋藤茂吉は二十八歳違ひのふさ子に百五十余通の恋文を書き送つてやまない。これが歌人であろう。眼もくらむばかりの官能的で嬉しい程の力がある。

人との出会いは赤い糸をたぐり寄せることにある。人は一人だけで生き抜けるほど強くない。坦々たる無為なる日々、処を変えても事柄を色々となつと、虚しさを埋めることは出来ない。取り上げた歌にみられる如く一人の人との出会いにより、無為なる人生が激変している。

佐伯裕子はあとがきで与謝野晶子の婦人公論での一文を紹介している。

男性は参禅して冷たい床上の座に黙想し、旬日に足らぬ接心の行などで掴み得る悟りは浅読なものであるが、男性がその道をとることは好いことと私はする。女性には参禅の必要がない。

女性歌人としての心意気が伝わってくる。男性の一人として負けてはいらぬ。

私の 一首

折る枝を打ち交はす音のこぼれこぼれ花戦せし子の 日日も夢

鷺沢朱理 「短歌研究」06年9月号

先日、新作制作のための調査研究で、京都を訪れた。雨が強く降ったかと思うと、雲は薄灰色のうちにやわやわと光を散らしているという具合だった。寒雨というより凍雨といつてもよいそれは、訪れた大徳寺の石畳を冷やかに濡らし、砂利は時々足先に縮こまるように集まっていた。

塔頭の一つ、織田信長の菩提寺「総見院」が特別に開かれていた。奇縁に感謝して、裏手の信長と正室濃姫の墓に手を合わせる。その時ふと思いつくことがあった。

この連作を成し得なかつたら、僕の中で《彼》はまだライバルであり、憧憬と嫉妬の対象であり、どんなに悔しくても奇才の名を奉らなければならぬ存在だったのかもれない、と。彼——とは大学で出会い、ともに学究の道に進もうと誓った友だった。あんな季節はもうない。社会学・心理学を専攻する彼と、美学・文化史学を専攻する僕は、時に激烈な批判を行い合い、それは学知だけでなく、互いの感性や倫理の領野にまで拡がっ

た。既成を次々捨てて新しい破壊をシャープな思考で推し進める彼は、常にα（アルファ）——始まりの人だった。一方、社会人も見えない力に人形のごとく練られていると運命論者のように呪う自分はω（オメガ）——いつも終わりの人間だった。

そんな彼にωを与え、僕にαを与えたのは、知らぬ間に彼が企業に就職を決めてしまった事。彼にとつて探究とは生き方の謎に答えを与える事で、研究者になることではなかった。

その時の壮絶な虚脱と喪失が生み出したのが、連作『四曲一隻屏風「濃姫」』である。一人ぼっちで院に進んだ僕は、今思えば笑えることに、《惨め》だったのかもしいれない。

短歌に手を染めたのもその頃だった。

大学院で博物館学と文化政策論の研究を行った。先輩の紹介で名古屋博物館の提携館、名古屋市秀吉清正記念館で働かせてもらった。この連作は博物館の資料や蔵品の数々をもとに構想して、数ヶ月を費やした後

完成された。

濃姫という美しく強い意志を秘めた一人の戦国女性。その隠された苦しみと浄化への願いを四曲一隻屏風に描き尽くす。蝶と渾名された美濃の領袖斎藤道三の娘で、織田信長に嫁いだ帰蝶。後に濃姫と呼ばれる彼女は、夫自身が行った美濃攻めにより故郷を喪失した。

掲出歌は、また彼女があどけない日々に見齋藤義竜（父道三を滅ぼし、信長と戦う）と遊んだ花戦（桜などの枝を折つてするちゃんばら）を回想して歌ったもの。

近代以降なら「枝を折り」と言語習慣が命ずるところを、流麗な古典様式を現代に活かしたく「折る枝を」とし、花戦にかかる序詞を作成した。また、気品を説いた長塚節の「芋の葉にこぼるる玉のこぼれこぼれ小芋は白く凝りつつあらむ」を転位し、打ち交わされる枝から桜がいくつもこぼれ落ちる姿を描いた。

この作品は乗越えの季節に成ったもの。

《彼》とは今、激烈を拭い去った光の中、友人として認め合える優しい関係になれた。

近刊歌集涉獵

藤原龍一郎歌集『ジャダ』（短歌研究社）

六本木ヒルズは暗喩ならざれば硝子の壁に雨滴の飛散

大正十四年の日暮銀幕に無言のバスター・キートン走る

酔いどれは船のみならず永遠に酔う韻文のアナキストたれ

帝国ホテルにも「唯ぼんやりとした不安」満ちて剥製の白鳥の悲鳴

ブンガクと声に出すこの疚やましさを嘲るようにきつね雨ふる

「キオスクのおばさんにメガネを褒められた」ほどの幸福ありてぞ孤独

ゴムの木の肉厚の葉の腐蝕こそ捨て来し夢の名残であるか

円谷が抜かれたその名ヒートリー利那憎みてその後忘れき

コスプレとして電飾の軍服の少女一団墮天使のごと

街に棲む大鴉をわれ祝福し雲にあらす／なまぬるき雨

ハイビジョン画面に小雪うつくしく微笑みたれどいつか灰燼

お台場の共同溝にバルチザン潜み期すべし本土決戦

本会への入会方法&会費について

本会に入会される方は、便せんなどに住所・氏名・電話番号、略歴を書いて本部（奥付の発行所）まで詠草（十首以内）と一緒に送付下さい。

その上で郵便振替で入会金千円と会費半年分六千円（会員の計七千円をお振り込み下さい）。

入金確認後その次月の号から雑誌を送付いたします。

なお詠草締切は前々月十五日です。添削希望者はその旨明記して添削料五百円（十首まで）分の切手、切手を貼った返信用封筒を添えて送って下さい（添削料は二回分として千円札でも可）。

郵便振替口座 0086018179534

中部短歌会（口座名義）

会費 同人 半年一万円

準同人 半年七千五百円

会員 半年六千円

注意事項

- ・新入会は特別の場合を除き会員からです。
- ・同人詠草は十五首まで可。それ以外は十首まで（ただし二月号詠草のみ十五首まで可）。最小数は三首。
- ・添削料は月例詠草に限り十首まで五百円です。それ以外の添削については選者と直接ご相談下さい。

〔二月号訂正〕

六十一ページ 長縄正芳 四首目

礫塊を総身につけし雌岩の年々新しき標繩受くる

十首詠 II



幽体

横浜 堀田 季 何

仄明る都をおほふ排瓦斯にうすらと滲む銀河おそろし
砂漠より砂漠でふ字が氣に在るも東京はやはり砂漠のたくひ
空洞化したとふれば鳥賊飯の鳥賊再空洞化して滅ぶらし
ほろほろ雨の昭和通りを居酒屋へ急ぎあゆみつ日本人われ
夕ぐれの飲屋の看板かなしくてかかるネオンを見るために寄る
河豚の汁飲めど死なぬを確かめてたまきはるわが命も試す
苦しみのしみついてゐる記憶には耽溺できるものできぬもの
幽体のごときカクテル注がれつつそう薄き硝子盃へと
居酒屋を四五軒梯子してをれば街は光に浄化されるつ
老残のゴールデン街は鬱金色曙光に業を曝されるれば

コペンハーゲン

島 根 加 藤 嘉 昭

マレーシユ、マレーシユ 名古屋 青 木 久 子

霽降る朝の庭に奥は雪と邑に育ちし妻のつぶやく
寒の夜の肩の疼きに目覚めたり触るれば妻のぬくみ伝はる
水も温度も低きに移る抱きたる妻の体温移りきてぬくし
DNAに無実あかさされし菅野さんされど奪はれし時は還らず
自白強いるかかるありようはファシズムの名残りならむか冤罪多し
自白強いらるる人の心理を解き明かす教授の言葉諾ひてきく
でつち上げて文人の心封じたる治安維持法横浜事件
「坂の上の雲」の視覚化拒みぬし作者の心無視されてゐる
コペンハーゲンに温暖化合意難航す極の氷山崩れゆくみよ
冬ぬくき屋根より下りてくる鳩よ分かたつ幸せなど我にはあらず

特派員経験を聞くピルゼンのグラスの耳を傾けながら
ウイーンの街の小路の焼きたてのパンが薫ってくる語り口
「イカスミのスパゲッティはうまかった。確かクローアチアの村だった」
パレスチナ取材に後日談ありてラムステークを取り分けておく
その扉あけたらルーブル美術館グラスを左手に持ち替える
世界史の隙間のぞいているような徐々に脱線していくような
氣にしないことは「マレーシユ、マレーシユ」が鼻歌のようなアラビア語かな
なるようになるき「マレーシユ、マレーシユ」と口に転がるエスカルゴたち
「戦争をいくつか経験した者として平和の大切さを伝えたい」
グルジアの蜂蜜アゼルバイジャンのジャムを一匙すくえば、蝶

いつもの道

蒲郡 中畑智江

路面電車

浜松 川野睦弘

薄ら水を落として遊ぶ子の下で朝の光はいく度も砕けつ
うつむくはよその子なれどあの子にも冬の葦のさみしきありて
射干玉の睫毛ばさりと惑星が落ちてきそうな瞬きをする
かっこいい角度というのがあちらしく庇を上下させてばかりだ
空のために在る水なのかと思うほど空を映せり君のなみだは
どこ見ても雪だと泣いた足元にいつもの道はちゃんとあったね
箸をまつ箸置きのように静かな子いいのかなあと思つてしまふ
白雲はながれながれて誰しもが今にとどまることはできない
幾つもの君と出会える明日ならば楽し 思うがままに生きなよ
ひだまりに眠りたる子を掬い上ぐ四月はまるいおおきな窓辺

衝動

和歌山 紀水章生

わたくしはここにをります手をのべて鈴掛の樹が空にささやく
葉の雨を降らせ去りゆくものがある姿を見せぬ獣目で追ふ
滑り台すべりゐる子の影長く空にひろがる夕焼けこやけ
ものかげの子らの記憶をまとはせて風に木の葉の走り去る園
蕎麦処愚庵へ入れば暗がりに全裸男女の像が抱きあふ
影のなき群にまぎれて恍惚のひかりのなかへうねる道ゆく
温もりが羽の下より失せはじめ発つといふ衝動とたたかふ
消え残る鳥の羽音に南天の房くきやかに秋天を揺る
ほほを打つ風の冷たさ鳥影をしぶきの果てへおきざりにした
沈む陽にま向かふひとの背の鬒りあなたは空へそらへと還る

終の別れ

名古屋 後藤美代子

ぬくもりをともしなふひかりふりそそぐ窓のほとりは柚子の実のいろ
ヒーターに馴るるからだはあたたまりこの一輛の血もめぐりゆく
豊橋の町なかを行きゆきちがふ電車総身に広告はある
あたらしき〈ほつトラム〉なる車輛などにほふがごとく古きとすがふ
老朽の一途をたどるゆきかへり余生みじかき車輛も走る
鉤の手にまがりなどして約五 たいくつすれば路線は終る
終点のそばに車庫ありイベント用レトロ電車とわれと目があふ
〈おでんしゃ〉も赤岩口の車庫にありどんなおでんか知らぬあやしき
終点をはじめりとして発つ電車なべて終りは始めならねど
日のもとに西へとくたる坂みちの軌道敷き石かがやきわたる

ねえやさんお供にお稽古通いした旧名古屋嬢逝くを惜しまん
生涯を踊りの師匠にかけし小母華やぐ舞台の彷彿とせり
かくし芸習いし踊り「博多夜船」檜の稽古場主なく侘しら
数多なる思い出縁しみじみととりとめのなく胸に広ぐる
知らせ聞き眠れぬままにペンをとり歌等詠みて空しらじらと
にこやかに呼びくれし声遺影より聞えくるよう読経のなか
「華やかな人生でしたね」口中で語りかけたる終の別れに
睡りたる如く鎮もる花の中天上にても舞うを祈りぬ
懸命に八十路の生をかけぬけて穩けき面にすべて閉し込む
また一人大切な人花野へと送る日の雨冷たくしみる

晩秋

蛭川 鈴村芳江

赤い靴

横浜 中野實恵子

枯野から戻る家内に飾りたる五本の向日葵存在感あり
姑の介護に暮れたる夏思ふ庭の向日葵の花記憶なし
庭隅に秋の陽を受け向日葵は重き実をつけ首垂れて立つ
木蓮の残り少なき葉を散らす雨音聞きつつ眠りに落ちぬ
雨上りの庭の木蓮葉を落とし銀の花芽の数多かがやく
来る春夢みて眠るや木蓮の花芽は銀色の苞にくるまれ
花桃の徒長枝を指定席として今朝も始まる鶺鴒の轉り
裏山の榎の梢に静寂を破りて気忙し百舌の高鳴き
大霜に朽ちかけし薔薇小春日に頭をもたげ花開きおり
陽の落ちて急ぐ農道枯れ尾花また明日ねと穂先をゆらす

双松

名古屋 千村一子

たおやかに幹差し交わす達吉の若書き「双松」今日祝ぎて掛く
新婚のわれらに父が賜ひし幅若木のままに睦む「双松」
赴任地の釧路の職場に得しえにしすがやかなひと孫伴い来
うち深く凜たるものを秘め持つや雪割草の如きフィアンセ
生物学科自ら選び父祖四代ものづくりより己れ放ちし
いくそたび夫怒りきか家業とは縁無き生物究むる孫を
姑の叔父水産学の先駆者にありせばその血孫駆り立つや
平凡社百科事典に名をとどむ水産学者の祖は今息吹く
生きている証しの賀状代筆す夫は墨痕凜と書きいし
長寿無き長命を生く 級友もネービー仲間も名簿より去り

赤き靴履くをためらう齡なり七草なすなわが生れたる日
うす白く古木に咲ける梅の花寂寥の身に明り灯れり
春闈け来雛のまつりも終りたり嫁ぐを忘れし娘は五十路へと
夜桜はひそひそ話はじめたり義経はいま萬福寺かと
五月雨とう美しきことは薄れゆくときにゲリラと名を変える雨
遣り切れぬおもいを包む紫陽花の花穂重き六月のうつ
あかつきの嵐は文月その刻にわが半心でありし兄逝く
夏の終り秋のはじめか曖昧な九月のわれのライフスタイル
金木犀樹下にじゅうたん敷きつめぬ土に還せぬ思いのあれば
山茶花のこぼるる庭や歳月は哀しいほどに人を変えたり

アレッポ石鹼

扶桑 小野寺紀美代

ホテルの扉の高きとにこは外国とくぐとしみじみおもうシリアの初日
建物の古きを気にせねばサーピスよし食事もリツチに疲れを癒す
巡礼者数多行き交う巨大スーク対面売買娘は楽し気に
水注ぎにされし一メートル程のラツパ音色出せずの無念伝わる
器用にラツパ操る細身男長睫、つぶらな瞳にしぼし足止む
特産の「アレッポ石鹼」産みしアレッポ 戦の歴史刻みし土地と
シリア国民、タイ国民のそれに似るやさしさゆえに呼びしか襲来
肌への刺激懸念は杞憂にオリブ油の馴染みて肌ツルリンツルル
砂漠国とう概念を払拭さす意外に樹々の繁りに遭いて
軍施設前の撮影厳禁を胆に銘じて越すシリア国境

小春日和 小牧 鳥居 治子

トラのルビリン 名古屋 伊神 華子

さやさやと小春日和に揺れている皇帝ダリヤに見守られている夕焼けの空にさよなら言う間なく十五夜月の早や昇り来る寒空にオリオン認めて安らぎぬ明日の希望の湧き来る光ます寿司の笹青々と際立ちて鱒のピンクと味わい醸すます寿司を食めば越中国守なる家持の歌思い出でたりどんぐりをプチプチ踏みつつ山道を夫と二人の紅葉狩りゆく礫刑の鳥居強右門長篠の氷雨に煙る城跡に立つ鳳来寺急な石段仰ぎつつゆっくり登る導きあらんはく製の白イノシシはその昔鳳来寺の森駆けていたるや鳳来寺山の歴史を語る岩石群鏡出でたる巖仰げる

師走の出来事 各務原 水野 直美

何となく元氣の出ない昼さがりビタミンC富むハーブティー飲む南国の夕陽のような澄める赤ハイビスカス入りローズヒップティー紅葉も終りの山を眺める視界の隅の山茶花くれなゐ襟元をしつかと閉じて歩みゆく伊吹おろしの厳しき畦道頑に葉を巻くキャベツをほぐすと少年こころ解き放そうよ折り鶴をうれしげに見す鍼灸師往療宅の子に貰いと自殺未遂はかりし患者にむかいたる若鍼灸師の静かな怒り人間が寿司を囲みて楽しめばシエパード汝の餌運び来て食む去年はきしブーツを奥から出し来たる亡くせし鳥の餌の殻付く自分だけ不幸せだと思つてたそれぞれ何を抱える年末

基底細胞癌 江南 太田 典子

ポツポツと母の身体にできた肝斑（基底細胞癌）と云うらし「老^と齢だよ」と笑い飛ばせる母の肝斑癌と告げられ言葉失う癌告知一人で受けし母なりき「わかりますか」と医師問いたるらし診察時「どうして癌に」と問う母に医師淡々と「老化も一因」癌告知よりも年寄り扱いにショック受けたと母はこぼせり電話口見舞いに来なくていいと云う声はかすかに震えていたり心配はしないつもりが何事も手のつかざりて手術日の朝一時間のはずの手術が二時間半 大手術だったと母の戯けて八ヶ所の傷跡跡う生活は坐るも寝るもひとしごとらし抜糸終えはつとしたれど二回目の手術日すでに決められており

古道をあるく

神戸 井澤 洋子

雪虫

岩村 岡田登美子

どしやぶりの切目駅なり下り立ちてしたくの合羽に古道の一步
葛の延ふ路ほそほと雨しげし人なき峠越え恍惚のあり
ぬかるみて坐る草とてなき王子跡なり案内の石もしとどに
榎木峠の暗がりを超ゆ雨あがりはるかに定家（千里浜）の海
岩代の岡の昼食あからひく有間十九歳の無念おもひつ
有間皇子万葉歌碑の立つあたり護送の古道をへだててとほし
潮垢離の千里浜なるはまづたひ古道は鎖されうしほのより来
枕草子伊勢物語少女にて知りときめきし浜なり缶珈琲片手にあるく
実梅干す媪つくづく見つめしのちひそかに折るる古道を教ふ
市女笠にゆく和泉式部追ふつし身をさかりし魂のきららまとひて

目白の声

西尾 榊原はる子

棲みなれてよどむ心に冬晴れを飛べる目白の声さやかなり
身内より悲しみともない突き上げてくるを朝日に溶かさんとせり
真椿の開き初めたる葉は照れど心の澱にとらわれている
太郎庵椿の淡紅一輪は祖父手捻りの壺に活けんか
細き枝に紅葉はまだ揺れながら小さき芽さぎす葉柄の基部
寄り添いて生うる楓の双幹はかたみに太き根を張りていん
冬の雲暗き間より一筋の光は枇杷の蕾に射せる
意志をもて選べぬ土に立つほかはなき木木を縫う冬鳥の声
雨もよいの暗める庭にゆずりは若き葉柄紅色を帯ぶ
高層の住居の均一なる窓に明かりのつきてそれぞれの色

空の大きさ

常滑 磯村政乃

綿虫の浮き沈みいる橋の上目に追いながら立話する
綿虫を子らは追いつつ飛び跳ねて昔の私がそこに紛れぬ
行くわれの肩に雪虫触れなんと沈みて浮きて付き来る数歩
入れ忘れし風鈴の音聞こえくる冬至真近の日脚短し
どんぐりがほしいと孫にたのまれて落葉掻きつつどんぐり探す
紅の濃き山茶花の花一朝の霜のかかりて色を変えた
蕪大根届けてくれし人ありて今日は漬物漬けんと思ふ
漬物を漬ける楽しみ蕪大根柚子の香りて味良く上がる
策に干す切り干し大根晴れ続き色よく上り楽しみの増す
村々に語り継がれし獅子舞のやさしき仕草に見惚れておりぬ
時雨止み淡き日差しに末もみぢ眩しく光る露の白玉
血栓の取れたるやうに流れ出す信号待ちあし車のライト
盧舎那仏の眼のやうな朝の陽を一瞬見せて雲は閉ちたり
ベッドより見てゐる空の大きさにわが体内の拘泥放つ
わが視界今は病棟の窓のみぞ夢も現も映りて豊か
診察も検査もすべてバーコード入院患者は商品なるや
病気の宝庫だねと言ふ医師にまた生きたいは欲張りですか
「母さんと生年月日が同じだわ」車椅子押すナースがぼつり
北向きの部屋にてあれば堪へ難く抜け出して行く午後の談話室
母を待つ子供の子供のやうに頬杖をつきて窓辺に夕陽みてゐる

実の赤

岡崎 都築婦美子

転倒

半田 長沢春子

姿よく伸び来し南天夕映えにころころと実の赤はつやめく
何時の季も晴れたる空は美しく椿の赤は青につつまる

善き事の来たるがごとく重なりて真赤なる実をつけぬる万年青
すがれたる庭にひとともと紅色をもちて冬木瓜染しむがに咲く

黄葉も紅葉も散る小春日を意識して背を伸ばし歩かむ

さほどには親しくあらぬが電話にて近況告げ来ぬ淋しき人か
スーパールの棚は華やぐ花の色に赤多くして目立つシクラメン

ためらひの無く十二月に菜の花は翳り無く春の黄を見せてゐる

白菜に赤美しき唐辛子塩をふりつつ独りの夕餼

大根はしづかにゆらぐ鍋の中ふるふきにせむ温かき湯気

銀杏散る

蛭川 不破よね子

第三運動場

蛭川 額 額典子

来る春に芽吹く仕度かはらはらと時雨降る如銀杏は散れり

その肩に散りし銀杏の葉を置きて石の母子像冬に真向う

大銀杏の葉陰にやさしき母子像も裸木となれば肩のきびしき

いくそたび孫遊ばせしお礼とぞ媼は散り敷く銀杏を掃けり

白木の箱に還りし兵も夢持ちて発つ若者も銀杏は見しか

大銀杏散りて見え来し御社の柱に祭りの幟はためく

玉葱は根付きたるらし切つ先に似たる葉凜と空を目指せり

根付きたる玉葱日毎色増して切つ先鋭く冬空を刺す

竜の鬚に冬陽及べば葉の抱くつぶら実瑠璃の色に耀う

種蒔きて旬日経るも未だ萌えぬえんどう畑に霜白く置く

走りゆく孫追いかけし傾斜道ひとり舞台の転倒となる

二回転なして止まれる坂道に幼なの嬉嬉たる笑顔の待てり

さし出す小さき腕をにぎれども起き上がるべき力のあらず

忙しき朝の途上に医院へと伴いくる人と出会えり

オレンジ色の上着は眩しきりげ無く「困った時はお互いさまよ」

〈腰椎の圧迫骨折〉冬の陽を浴びて横たう身を諾えり

子の心しみて思えど立ち上がる電動ベッドも腰に痛かり

背を屈め庇い歩みし亡き夫に重ね合わせぬ姿見の前

テキパキと夕食の仕度なす嫁の甘き洋食辛き和の食

背の低き吾を気づかう子と二人嫁が理想のキッチン改善

蛭川の子供等が夢育みし第三運動場は道と成りゆく

運動場を穿つ重機の騒音を世の変りゆく音と聞きおり

戦時下を耕し甘藷作りたる第三運動場に思いは深む

喪の幕を張りて英霊を迎えんと校庭の真中に生徒等立ちき

運動場の隅に小屋掛け地芝居を築しみし村は皆貧しかり

プラタナスの木蔭に広げし弁当を田仕事休みて父母も囲みし

学童の飛び跳ね駆けしグラウンドの足跡重機が無残に砕く

掘り返され土砂盛られゆく片隅にひとつばたごの裸枝は揺る

校庭を罰則で走りし日の辛さ友と語らう師を偲びつつ

そくばくの豆干すシート煽り上げ風は師走の心を急かす

三歳の孫 常滑 伊藤あさ子

後姿は亡き師に似たり両耳も髪は抜け方照り具合まで

日に何度もスイスの旅を思い出す時計の中のエーデルワイスに

大好きな曾婆ちゃんはある星ね教え込まれて見上げている孫

ランナーを切りて苺苗移植せり来ん春に孫と楽しまんため

婆ちゃんはここに座つて手はお膝 いたたまずまで時間のかかる

幼子はキッチンセットのフライパンの柄をトントンとその母の真似

ブロッコリー一房茎まで食べつくす三歳の胃は緑色なるか

胡瓜二本ぼりぼりかじり食べている三歳の孫キリギリスの顔

中身よりロールキャベツの葉つばだけ剥き取り食べる幼子三歳

重いねと抱っこをすれば三歳になつたんだよと誇らしげな顔

歳 晩 幡 豆 岡田眞木子

個人情報流出せしとう詫び状に背筋の凍る歳の瀬である

子を親を殺めしニユースさむさむと買うためらう出刃の一寸

狂いしといえと許せぬ殺すのは誰でもよかつたとぬけぬけうそぶく

夕暮れを引きずり込まれそうな沼にだれが祭るか龍神のほこら

台風に痛められたる大銀杏色付かぬまま冬に入りゆく

散る力使い果たしていさぎよく裸身をさらし枝張る樺

幹とおもひ触るる藤の木太き蔓のねじるところぬくもりのあり

海沿いの小さな喫茶店ブルーの電飾深海魚となりカプチャーノ飲む

冷ゆる夜半動きのぶきゴキブリを逃してやりぬ猫おさえつつ

勇気もて変らなければとおもう夜前に進めと木枯しの声

奥山の工房 蛭川 桜木喜代江

教職を退きて陶芸織物に余生楽しむ夫妻訪ねし

展示会に出展するとう裂織のタペストリー見事壁より迫り来

妙義山の荒荒しさをモチーフに織り込む裂織のタペストリーに魅せらる

古き布裂きて作品になす技の師のバイタリティー八十歳過ぎても

カサコソと枯葉木の実の舞い落ちて山の工房時雨過ぎゆく

土を捏ねカツパに魅せられ二十年温もりあふるる師との会話は

家の巡りにカツパ百態おどけたり師の人生のそのものと言う

カツパの形の花瓶に挿したるツクバネは持て成しならん優しくゆらく

奥山に月の半分過す師に時間はゆつたり流れ行きたり

来春は夫妻の個展と夢のあり漲るパワーに喝采おくる

背筋伸ばして 白河 円谷智子

整形外科よたよた歩く人多しなるべく吾れは背筋伸ばして

近道の路地を通れば様ざまな暮し方見ゆ歩くも楽し

玄関の汚れ洗いて拭くに逢う 今日が蕾の鉢に変えてあり

池の鯉死す度理めし柚子の根本 鯉が多数の実を成らしたり

青柿の落下案じて居たりしが色付き豊作 余分落とす摂理

開業と共に育ちし桂の樹黄葉多数散らして匂う

順序よく吾がやる事が終らねば食が冷えても座らぬ夫

あまからの程度を越えし老の舌先づは何にでも醤油をかける

植物園のように植えきし庭の樹木みなもみじして浄土の如し

ピラカンサ、柿、柚子、林檎、色付きて目白、鴨、雀飛び交う

年改まる 西春日井 木村 和子

新 名古屋 渡辺 許子

新年に一つ歳取る慣はしを思へば重き吾が祖等の知恵
うなづいて心にたたむ齢一つ独り暮しをゆつくり生きよう
歌一つ新春を迎ふる筆先の乱るるも良し墨の濃淡
元旦にまとふ晴着の姿見に三人姉妹のわたしは長女
姉妹の歳の晴着は母の縫ふそれぞれ違ふ袖の丈など
年賀受く羽織袴の父とゐて時代錯誤の夢をまだみる
生きてゐる私が一人炎を守る囲む囲炉裏のおもかげいくつ
手をかざし暖をとりとたる火鉢なり今庭すみに金魚の住まふ
茜して蒲生野に舞ふ歌言葉千歳ひそかに想ひ繋げり
高齢を良き事として年の瀬の宴二つを断りとする

自然遺産の森 各務原 清水千歌絵

バス進む道の両側つぎつぎに真紅のもみじ葉見えて声あぐ
丈低き木はも若きかもみじ葉のいろ際立ちて濃ゆき紅いろ
陽に映えて紅葉の彩のかがやくにそつと近より手にふれて見る
あと数日にて師走となるに山々は今年終りのいろどりに燃ゆ
自然遺産の森に遺築されてどつしりと建ちをり江戸の庄屋の家が
豪農の北川億右工門が年貢米検査せしとふ玄関広し
土壁作りの大き別棟あり取立てし年貢米積みしか豪農なれば
小作人らの細ぼそ暮すを想へかし年貢米取立てて富める庄屋は
江戸の庄屋の建物なるを平成十五年遺族が市へと寄贈されしと
市民らの研修に休息に人家なく山合ひ広き別天地ここは

集い 中津川 大堀せつ子

東京と京都から友来るといふ名古屋に集うクラスメートら
きびきびと足運ぶ人杖の人車押すあり傘寿を越えて
俳句短歌、エッセー、絵画と籠りても老いの愉しみそれぞれ持つ
内気なりし友の成している社会事業 自宅開放し地域に尽くす
デイサービスに通う日々とう代筆の不参のハガキに心痛みぬ
半月を病みて過せば知らぬ間に黄金に散りしく庭の銀杏葉
快方と告げられ病院の帰るさの明く大きな十六夜の月
実家にて母の遺品と貰い受く短歌五十年の合同歌集
自らのうたに書きこみ遺しあり合同歌集母の頁に
短歌五十年の合同歌集ひもとはば古き友がら名を連ねおり

夫の駢 土岐 丹羽 昌子

里山はすっかり紅葉しその中に天空をさす公孫樹目を引く
一夜さにどつきり散り敷く枯落葉風雨に急かされ冬仕度なす
黒豆の生莢盛りしふた所何が喰いしか空莢の山
豆作り始めてよりの何十年獣の被害は始めての事
白豆は烏が啄み黒豆は獣が食みて共存の世ぞ
ひしひしと温暖化進むこの頃は農作物は虫に荒さる
曾孫は自転車ほしとカーマにて「ピンクがいい」とはやも乗りいる
曾孫は赤に紫の風呂敷を体に巻きてドレスの気分か
幼稚園の大根引きは一本ずつ三キロもある太き大根
夜半覚めて短歌作ると指折れど夫の駢に阻害されたり

風 白河 菊地 良江

短歌を詠むご縁のありて終日を心の言葉探す楽しみ
溜りいる重荷支ふる息子のあれば瞬間の感謝拾ひて歌を
紅葉に酔ひし日暮の空高し色なき風は冬を転がす
大風はそつくり景色塗り去りて緑の芝生黄の絨毯に
季運ぶ風は那須嶺降りて街大空泳ぎいてふ散らせり
メール文字労わりの声音生活に安らぎ賜ふケイタイの術すべ
混雑の日展会場釘付けは滲みとかすれの胸打つ書の前
十一月八日八〇二〇ここに集ふ同伴席の配慮まで優し
歯の祭典口腔年齢還暦前まだ夢持てる発見のあり
引き算をしつづけている体力と脳爪先立ちして足し算にしよう

留守番 岐南 森 治子

見上ぐれば雨後の秋空ゆく雲へ手を振るように樹々の秀つ枝は
すぐそこに冬が居るよというように団栗こつんとわが肩を打つ
滑り台にかすかなくほみ昨夜の雨をうすくとどめて光をかえす
恐れを知らぬ二歳の絶対命令なりベビーカーより「あっち」と指示す
「やだ!」「ちがう」それは絶叫 将来の楽しみな児ということにする
〈おかわり〉の要求だった炒飯を完食後意味不明の雄たけび
留守番の〈代理ママ〉にはなおさらの難解 二歳の未完日本語
ハンドクリーム欲しがり真似て塗っている荒れてはいない小さな手に
二歳まだ変幻自在のんのまど指したる月にバイバイをして
伝達の言葉が自我に追いつかぬ二歳つくづく小動物なり

西伊豆の旅 中津川 板津 恵美子

雪被く富士は車窓に迫りきてくつきり聳ゆ裾野広がり
色付きし蜜柑畑の広がりてロープウェイより見下ろしている
ロープウェイかつらぎ山頂に差しかかりぐいぐいと弾みてのぼる
西伊豆の堂ヶ島めぐる遊覧船自然の驚異を海に学べり
岩肌は波に洗われ荒々し島々を縫う遊覧船に
薄暗き洞窟に入る行く先に光降りくる「天窓洞」は
フェリー「富士」白波たてて駿河湾風切り進む甲板に立つ
空と海展望風呂に広がりて水平線は真白く続く
姉に手を貸せる旅にて紅葉とフェリーにめぐる海満喫す
陽が射して旭ヶ丘の大銀杏伊呂波楓は一際冴ゆる

亡夫三回忌 豊橋 牧野 万里

亡き夫の願ひ叶ひし友人の御僧の許へ心通はず

夫のはや三回忌なる法要の常勝寺にての叶ふ念願

身動きの思ひに遠くままならぬ夫法要の旅仕度かも

妹と眺める車窓外景の街は角角家並迫れる

ちらちらと雲間を洩れる冬日差しさし込むままに受く老姉妹

雲海の頂点きざす雪嶺富士迫り来たれば幸せ覚ゆ

雪嶺富士おろがみ叶ふ本日の夫の法要清らなるとも

「新富士」に停車する間を雲海の上昇なるや富士嶺閉ざせり

「野路菊」の友人集ふ法要に夫の幸せ遺徳ともして
亡き夫の面影しかと胸中は白蓮花を法要読経

十二月 蛭川 村瀬トシエ

梅桜なんじやもんじやに百日紅山茶花咲きぬ一年早し

蛭飛び蝸に続き法師蟬今日綿虫のふわふわと浮く

幾日の庭のはなやぎ満天星の紅葉散り果て綿虫の舞う

足早に四季は流れて十二月父母の忌の月墓原に立つ

十二月やつでは花を掲げおり父母の齢を越えて生かさる

久々に夢に出で来し母に会う十二月六日立ち日の近し

築五十年古りし我が家をひかひかに磨く嫁有り宝と思ふ

四十キ口に満たぬ細身の身軽さか日がな一日よくぞ働く

八十頭の牛の飼育をこなしつつ笑顔忘れず物に動ぜず

昭和一桁働くだけの能無き我を見習いくれしか嬉しきことよ

徳山ダム 有松 鈴木千代子

ダムサイト公園真下は雄大な徳山ダムに足の竦みぬ

洪水にダムのゲートを操作業の管理舎小さくダムの彼方に

集落の沈むダム湖の湖底より突き出る大樹の梢は感むりよう

ダム囲む無限の紅葉ふる里を撮り残し逝く老婦想い來

水涸れに村は雨乞う夜叉ヶ池主の大蛇にすがる伝説

夜叉ヶ池いまは水涸れなき里と手作り人形売る道の駅

掛け流し温泉芦原の晚餐は蟹の一匹を捌くに苦戦

行きにみて帰路も気にせり独り居の老の家雨戸みな閉ざされて

飼猫のシロを亡くしし淋しさをぼそぼそ語る会釈の後に
車庫も紐引きて無人ぞかの女は孫と楽しく今は暮らすか

師走の庭 白河 松井好子

尉鷄じゆうけい師走の庭に初飛来しげしの間姿榮しむ

すがれたる師走の庭の片隅に今年もほつほつ藜藿ふきわらふくらむ

霜おりて坪畑の蕪甘くなり友数人に届ける小春日

山茶花の蜜吸うらしく鴨の出入りが多く花散らしつつ

播種おくれ発芽あやぶむ莢豌豆かけ藁の下うすみどり見ゆ

鴨が残す梅もどきの実朱色冴え雪降る庭の景を想像

暖かき師走の午後のティータイム京都土産の抹茶に憩いぬ

川谷の特産長芋届きたり友つつがなしやと電話に確かむ

感謝しつつおだやかに老いていく友の言葉に我もうなずく

からすうりの絵手紙届く日故郷は紅葉散り果て枯れ色の庭

雪

名古屋 小木曾 允子

賤ヶ丘の紅葉

坂下 加藤 益子

銀雪に覆われた庭仔犬のプウ玉を転がすさまに走りぬ
早朝に子供らの声雪礫右に左に飛び交う校庭

ころころと雪転がして雪だるま南天の実の目鼻が付きぬ
吹きすさぶ風に木の枝つもりいる垂り雪落つ音もたてずに

道祖神綿帽子かぶり手をつなぎ冬木立の中少しほほえむ
風花の舞い散る駅に降り立ちて人々はみな家路を忙ぐ

空中に舞う細水が街灯の光で幻想的に見えくる
山里に消え残りいる斑雪春の日差しに白く光りぬ

草木の萌え出づる原に春雪が静かに静かに降り積もりいる
花弁雪降りしきる宵一人いて思索にふける明かりを消して

冬桜

名古屋 酒井 ゆり子

霜月に想う

坂下 原 志津子

紅葉と四季桜の咲く小原村訪ひ来て里山にこころ癒さる
つれだちて今年も小原の四季桜を共に巡りぬ小春日を背に
茅葺きの古民家の在るところまで急勾配の坂を上がりゆく

里山のなだりにひそと冬桜は哀しきまでに花咲き満つる
かたはらに佇つ夫と見る冬桜 残年の日々よ穏やかにあれ

客卓の花籠に小さく活けられて吾亦紅、白菊は楚々と華やぐ
いつ来てもふる里旅情と懐しみ決めたる席に甘酒を待つ

雪もよふ風の寒さに夕早く呼び合ふさまに町の灯ともる
榎櫃の実のドサツと落ちし庭の音聞きつつ師走の夜の灯の下

冬の夜の静かに更くる灯の下に歌紡ぎをり 一面影寄せて

夕つ方真白き猫の親子づれ枯色の野に溶けるがに消ゆ
火曜日には火廻り水曜水廻り掃除に専念気分すつきり

廃屋の宿家の解体はしまれり進む過疎化に町並変わる
今年ほど茸の出ぬは珍らしき霜月二十日未練の山行き

もしかしての最後の念押し山巡る今年も松茸採れず諦らむ
高峰山の紅葉見つつ干し物す吾も装い午後は歌会に

巻き初めし白菜の葉の間出入りする赤蜂の羽朝露に濡れ
黒蠅の嗅覚とみに鋭かりするめを焼けば厨に疾く来る

一つ炬燵に温まりおれど別空間夫は将棋われは短歌に
共通の趣味にと将棋の棋譜観れどどうにも心のキーに響かず

霜月は漬物の季節梓川で野沢菜、かぶら、大根洗う
梓川の長き橋渡る兵隊が野菜を洗う吾らに手を振る
松本の五十連隊兵士らが梓川辺でよく訓練せり

軍歌うたい靴音たかく響かせて行進する兵見送りていき
紅葉狩り真赤なもみじに電飾し雪舞うさまをテレビは映す

青空に庭師さやかな缺の音 炬燵で本読む耳に沁み入る
びっしりと椿の苔つきおれば切るには惜しきと手を休めおり

すつきりと剪定されて木洩れ日に庭の千種明るく微笑む
診察ごと内科主治医と眼科医師「正常ですよ」笑みて頷く

三歳で右目失明左弱視 特製眼鏡とルーペに頼る

女高生

坂下 鎌田綾子

歌壇見てのど自慢聞き天地人ひそかに吾は日曜日待つ
朝毎にチラシの裏の白ければ鉛筆さがす歌出来そうで
運勢欄に下手は上手の基なると今朝の新聞にほつとしており
昨夜も猪が諸掘りゆきしは聞かずなり糶田の穂に雀のあそぶ
駅前広場に腰据え化粧する女高生の脚長きがまぶし
足投げて舗道で飲み食ぶる女高生覆いやりたし吾は老人
握り返す意志はまだあり倒れたる姉は真白きベッドの中に
七度目の吾が丑年も今日師走うすき日めくりためらいめくる
テレビなる黄門様に逢う時間煙草もみ消し夫は真顔に
故もなく涙いで来ぬ暮れ早き峽すぐ車の尾燈まばらに

リトルワールド

名古屋 長縄正芳

尾張野の有料道路只となりもみぢ盛りの百曲りゆく
はや着けど集りてあしマイカーに博物館の熱気をおもふ
訪ひたるは幾年ぶりぞ店増えて派手によびこむ和食洋食
この秋の売りは世界の肉料理朝餉か昼かどこにもぎはふ
メタセコイアの黄葉ここにきはまりてアングルいかに撮りてもよろし
園めぐるレトロなバスに乗れる人小径あゆめや木の実を踏みて
シベリアの精鋭ぞろひの演技者ら拍手万雷の中天に舞ふ
年端ゆかぬ女男の至芸に魅せらるる観衆ゆらぎ舞台がゆらぐ
曲り家の秋のよびもの芋煮会そのあつあつの椀に足らひて
恋しげにすり寄りて来し子羊のつぶらな瞳にパン投げてみる

湯の宿に

鳥取 足立早苗

ちかちかと沖にまたたく漁火を海沿ひの宿よりみつめてをりぬ
漁火のまたたき吾へのサインのやうなそんな気がする静かな夕闇
霧雨の午後から霰と変りたり山の端の虹ひとときの美に
湯の宿にひと日は昏れて華やかに湯面びつしりの薔薇湯に浸る
設へし紅いろ黄色の薔薇の湯に浸りて肌もうるほひを持つ
薄暮なる海は風ぎゐて向かひ岸の民家の明かり小さく瞬く
あと幾度斯かる奢りに浸れるか気の合ふ友らとはしやぎて帰る
山茶花のくれなるの濃く咲く庭を祖父亡き今も想ひて止まず
水仙の咲き出す今朝の庭に立ち賢しらの伯母の葬りを送る
ユーゴーの筆致にふとも逢ひたしと書庫より一冊おもむろに抜く

荒風

豊橋 鈴木志津枝

荒風に飛ばされしハウスの中に居る君子蘭よその悲しさに添ふ
眠りゐる蘭の葉毎に手を添へてせめての温み届けむとせむ
心して育てし者と視る人の誤差の線引おつおつと知る
善きことのみ憶ひ交はさむ日向ほこ落葉気になる吾もただの人
労りの「今日は何が食べたい」と聞かれし厨の灯はともし居て
咲き初めし水仙の香のなごみ来て消すべき昨日を忘れぬし今日
ひとしほの水仙の香を供華の日は亡夫の声とも風音愉し
露畑に冬草覆ふを寂々と師走の影に臺の芽を踏む
寒椿佐助の幾種に満されし庭は好きよと散る刻を消す
寒椿紅極まれし下かげに露の親葉は臺抱きぬし

今

名古屋 橋本ひろ

生き継ぐ故に

名古屋 西川 修

太陽を地球で仰ぐ人類は永遠なりや疑い出づる

生涯を小さき界に在り馴れて今昇る陽を日常とせし

近未来などを想えど数年後吾の生命の保証は識らず

海洋に島を沈めてゆく兆し椰子の根元へひたと寄る波

緑濃き大地に氷河消滅を宇宙衛星視野に入れおり

温暖化加速してゆく地球とぞ今日の糧炊く民に故なき

吹き荒ぶ砂漠に影の動きゆく獣の群れは映像の中

湖の水を競いて求め来るペリカン達の域も狭まる

殺戮は虚勢のかたち少年は未来問われて黙深く立つ

薄命の幼き骸を置く映像見えて怒りの解けぬ老残

いのち

豊田 山村博保

アラフォー

一宮 岩田 恵理

子が育て我に委ねしコリー犬大往生す紅葉散る庭
十余年飼いたる犬を弔いし施設の今は動物愛護センター
給食の残菜集め猫を飼う四年一組級訓は友情

単元名「いのち」の総合学習に子らを率いて愛護センター
捨てられし犬と猫とが檻に居て飼い主を待つ秋晴れの日に

案内と説明をする職員が決して語らぬ犬猫の爾後

センターの見学終えし子供らがつぶやけり「犬はいつまでいるの」

子供らの今日の学びは真つ白な心に命の種子を播くべし

飼う愛と買う欲望がすれ違い犬に飽きれば捨てている非情

闇に紛れ野良猫に餌を与えている老婆の所業裁くは誰か

東福寺通天橋に人あふれ寄れる心に楓は燃えぬ

散り際をただ日に入れんと思いたりここ東福寺に生き継ぐ故に

風の音聞けば日に入る紅葉は散らんと輝く夕日のなかに

乳呑み児の握り拳のさまをして路辺にひと葉の楓散りいる

赤競い長けゆく秋を一会とし葉の散り際は後先の疾し

客待つ間老いし写真屋が眼を遣るは紫煙の先の遠き東福寺

一幹に長けゆく秋のひと時を緑と黄と赤三世代なす

幹のもと楓落葉は群がりて朽ちゆく赤の時間を持ってり

濡れ嵩み歩道に散りいる楓の葉滴をたたえ茶褐色に澄む

東福寺いま暮れんとす眼裏に赤を焼きつけ家路を急ぐ

朝食はパンか飯かと判じおり電車に向き合う細身の美人
お互いに肩触れ合うも他生の縁 通勤電車が時々ゆれる

スカートの赤がやたらに目立つかも電車の中のアラフォーわたし
アラフォーの男性版はいかにやと单身赴任の夫を思う

幼子を膝に置きいる人のいて女性車両の今朝のやさしさ
余りにも張り切りすぎた昨日なり絶対今日のはのつたり過ごさん

仕事外お付き合いにて若き子の打ち明け話をどんと聞きたり

やすやすとわが忠告など聞かずもなきとしりつつ長話聞く

世代間交流すすめるマニュアルの「聞き上手たれ」には忍耐が要る

評判のじゃこ天もとめて帰るみち冬至の夕べの風が冷たい

朝のひかり

犬山 井上恒子

一人の友

東海 石井美雄

胸つんと尖るは青き思慕もてる少女か夕焼けを駆けゆけり
夕空の筋雲白く稽田の風ころよし秋深みゆく

オカリナの音色が森を渡りゆくパズルの欠片はまりゆくがに
オカリナの演奏森に澄み渡りもみの木広場の空へ抜けゆく

言ふよりも言はざる悔いをけふ選び鏡の中へにつと微笑む
良き方へ思ひがけなく流れたり細波いまだ立つ情あれど

太極拳果てて見上げる大寒の空に鶯二羽悠々と舞ふ
花びらが風に舞ふごと逆らはず眠らう朝のひかり信じて

会ふことも叶はぬ花を恋ふならむ曼珠沙華の葉あを土手に
郷瀬川の夫の記念樹子らの代に満開の花咲き誇らせよ

時の間

扶桑 北村久子

水俣

笠松 日比野和美

モーツアルトの二百有余の時の間を今共有する楽曲のなか
明るさの中潜みいるは哀しみか心を揺らすセレナード十三番

サリエリの苦悩の前に輝きてああモーツアルト時越えて聴く
親枝を離れる時の名残りとも舞いゆるやかな黄葉一つ受く

月光に身を曝しいる裸木の梢揺れあう恥ずかしがりや
こうこうと冬木を照らす月光の影はキリンの網目の模様

冴え冴えと月照る森の木の繁み身を寄せあいて捨て猫眠る
潜みいる獣の気配月の夜は小鳥も風も音をたてざり

川の端照らす月光きらめきて冬木々の間に何の祭ぞ
雉鳩の鳴けば故郷懐かしと思ひ出マシンスイッチ入りぬ

秘めてきたDVの日日爪を研ぎ別れると決心安らぐ
友は言うむなしさ何かにすがりたい寝つけぬ夜を紛らすワイン

一人身の一汁二菜の朝御飯何か足りない雰囲気の中
しがらみを思いきり切り一步出た積もる鬱憤プラスに変えて

六十余今や再婚わずらわし会話楽しむ友求めよう
瑣末なる事柄などに左右され過ごして行くのが人生なのか

この年月道のり自体が人生と思えてきてる今日はことさら
現実を起こる何でも受け入れることしかないと腹を括るか

年末は欠礼状に心いたむ年年ほそる年賀の書状
年越しが遣り切れなくて日記練る貫く棒のようなもの無く

魔の意志に操られたる猫の舞モノクロテレビの褪せない記憶
授かりし神の恵の魚白き腹累々と御所浦に満つ

波止場から飛び乗る舟にとどかざるその日が不意に我にきたらば
永遠に癒えぬ病でなかりせば船も漁具も譲らぬものを

這ひ回る畳の氈の擦れるまで目を見開いて家族は見けんや
病より村八分の身にされしこと生き地獄なり人の世ゆえに

「水俣の会社が毒ば流すけん：」十有余年閉ざされし誠
実も虚も叫びも嘘も埋めたてて百問港に慰霊碑立てり

悠久の時失ふや有明の壊死の港の鈍き光よ
魚棲める人住める浦水俣に繋がる世界の海を忘るな

水晶になる

各務原 荻谷啓子

帰郷

名古屋 勝又祐三

校庭の銀杏の大樹の散り敷きし黄のジュータンに子らの歓声
風受けてこそこそ音たて落ちる葉の何か眩く言葉にも似る
足跡の大きく残る雨上がり足元気にして大根を抜く
雨上がり枯枝の先の水滴は朝の陽を浴び水晶になる
意に背き庭師に山茶花切られたり枝のまま落ち花の咲きいる
生垣の山茶花花びら落ちたるを数えながらに拾っている夫
夫の手に山茶花はなびら拾われてバケツの中はピンクに染まる
車のうしろお先にどうぞの張りあるも後に続く追い越せぬ黄緑
秋冬も苺トマトの店頭にあふれて児らは知らぬ収穫時
枯れてなおしがみついているすすきの穂幼な子母に甘えるように

ミニクルーズ

笠松 山口好子

Green Distery

横浜 神谷由希

浮き雲を天女と思ひて眺め居る三保の松原一ときの夢
出航を我らと待つや鷗たち波に浮きつつ離れず飛ばず
幼鳥に声援送り投げる餌の先の青松遠ざかりゆく
奪ひ合ふ翼乱れて撒く餌を空中キヤツチ海面キヤツチ
餌に群るる鷗も連れて晩秋の穏しき船旅駿河の湾に
秋の陽をたつぷり浴びし果樹園の蜜柑の果実ツアー客を迎ふ
一つづつ比べる甘さに差はなくも掬く樹替へては笑みのこぼるる
丘の上の絶景農園有る暮らし羨む会話は苦勞を知らず
紅の袂を振りてはしやぎ居る三歳参りの孫の手温し
きらめける駅の灯りも山里の小さき灯りも列車の景なり

志果^{こころ}たせぬままに帰ったりわれを疎みし山深き邑
故郷を棄つる積りで上京す五十年前の五月雨の中
葎生ひ休耕田は蕪^あるるとも鎮守の森は昔のままに
産土の神の社殿に額つきぬわれ敗残の兵のごとくに
森深し木洩れ日の射すつかのまを生^{いのち}命繋ぐる下草もあり
廃校の庭に残れる銅像は柴を背負ひて本を拡げり
戦時下の抛出免かる銅像はあかがねの質悪しければとふ
雨降れば欠席学童増えにけり傘持てざりし貧しき戦後
五十年の秘密を守りて友は逝く少年の日の指切りげんまん
戒名のなき墓の前憶ひ出のうからの貌は皆若かりき

孔雀石、緑柱石^{ベリル}、碧玉^{ジャスパー}、それぞれの緑に潜む古代の魔法
生るる前のみどりこの夢すぎとほりその掌の中に握られてある
みどり子はふと森深きにはひしてやがて樹の間を駆けゆけるべし
ジュラ山脈に緑のぶだう実るとき太古のけもの眠りはふかし
恐竜等死したる後の豊壤はジュラ山脈に葡萄みのらす
抱きあひて男女はげしき息すなり緑金の彩かがやく虚空^{そら}に
背徳もかがやくばかり女人こそ緑^{あそ}き天鵝絨の臉をもてば
流星痕 その青き尾を捉へむと希へる者等めしひとなるか
少しづつ脳幹死してゆくやうな寒夜は緑きいなびかりして
電節のもと人びとは回遊魚となりて青く漂ふごとし

秋の気

豊明 柴田 今日子

秋雨のあがりし朝の児童室やさしい陽ざし書架にさしいる
お話の部屋の入り口愛らしき靴がいくつもあちこちを向く
丑年の残りを飾るお話の部屋の壁画に秋の（まめうし）
読み聞かせボランティアの声徹りつつ幼と母のゆったりタイム
大型の絵本の中から飛び出しし擬音の間に笑顔ひろがる
手あそびの歌に合わせて声あげる幼の様の喜々としていて
気に入りの小さき絵本抱え来る幼子の手へ（機関車トーマス）
児童書のベストリーダー常連の（怪傑ゾロリ）ぞろりぞろりと
ていねいに頁の破れ繕われ貸し出しを待つ（はらべこあおむし）
散り敷きしオレンジ色の木犀のあまたの花に秋の気の満つ

ひとり暮らし

島根 石橋 由岐子

人ら皆山は雪らしと言ひ交わす師走のひとはや暮れてゆく
白菜に大豆小豆の並べあるひとり暮らしの媪の縁側
家のごとに切り様のちがう干し大根の縁側に並び秋の日を受く
訪れし我に気付かず一心に媪はむしろの大豆をたたく
去年よりは身の丈一センチ縮まりて老いの入り口に立つと知りたり
縁側の椅子に座りて常のごと老いて小さき母はまどろむ
高かったと言いつつ母は若き日に購ひしマフラー我にさし出す
二十八キロの古い母在りてふるさとにこの正月も孫らの集う
選挙には行かねばならぬ九十歳の母はゆるりと杖もちて立つ
幾年も棄ておかれたる峽の田にウターンの夫婦そばの種時く

冬の陽差せり

一宮 坪内と志子

今日ひと日感謝の思ひ一つあれば深く足らひて眠りにつかむ
耳とほく携帯電話かけられぬわればひたすら子の帰宅待つ
一年のまた巡りくる年金の生存証明に署名をしたたり
乱れなき文字にて正月会はむとぞ絶筆になりし友の文読む
明日在るとふ証しなけれど今日も生きて忘年会の約束をする
世に在るも永きは憂しと問ひかくる写真の夫に冬の陽差せり
農協前のバス停に佇つわがめぐり馴れたるさまに鳩の寄りくる
地下街を袖振り合ふもなんとやらふたたび逢ふはなき人とゆく
大家族たりし昔を偲びつつわがために買ふ小さき炬燵
日本海の荒波寄する東尋坊に米寿過ぎたるわれら遊べり

茜空

金沢 石尾 百合子

わが生のあとのくらしい手に余る成すべき事が脳裏を巡る
高齢の大学院を卒業し吾も驚きフラダンスはじむ
形から入りゆく、フラハワイアンのスカートつけて練習の日々
高齢の仲間と共に歌劇座の舞台に立ちぬライトを浴びて
茜色に染まりし余生息子は告げ来吾に待ち侘びし孫授かると
吾の出番息子らの許へと馳せ参じおきさんどんにと日々勤しまむ
高層のビルの眺望わが家にもほんのり小さな明りが点る
お互いに気遣いながら笑みながら母娘となりて家事をこなせり
沈む日の部屋ぬち深く差し入りて春待日の暦を染めぬ
ゆつくりと流れにまかせ何時までも臨む高層の半円の街

太陽光発電

春日井 川島千枝子

源氏物語

扶桑 鈴木淑子

二十年のつもり貯金の活用とパネルならべし切妻の屋根
やさしかる自然エナジー太陽光 群青パネルわが屋根飾る
をりからの緊急報道JCO事故 この日システム稼働始める
群青の三キロワットのパネル上げ今日から我が家は発電所なり
暁に陽光捉へしインバーター「クーン」と音して発電始む
はじめの発電メーター動き出しチンチン沸く湯を不思議に思ふ
快晴の光は連日わが家の売電メーター軽快に廻す
二十枚の並びしパネルは燦燦と宝石のやうに輝きてをり
晴れの日に雲の動きにメーターが比例しけふも数値を加ふ
車窓から住宅風景ながむれば海のごとくに光る屋根みゆ

嵯峨野

江南 赤尾洋子

分かれてはまた会ふ流れに渡月橋まずぐに架かり秋へと続く
水に浮く鴨を襲へる鳩の群れ何を競ふや空は晴れて
野宮の黒き鳥居に「赤い糸」かけて結縁特む乙女ら
忘れ物取り返すがにほつと夫との記憶拾ひて歩く
坂道に生ふる雑草色づきて足裏にやさし寂庵への道
一人生えの蕎麦の花むら嵯峨風にそよと靡くもただ頼もしき
寂庵の門に下げたる投句箱小さき窓に心交はす
「寂庵」の表札文字の軽やかさ秋咲く庭に安らぎて立つ
しなやかに莖立ち匂ふ秋明菊 白花そこだけの風に揺れいる
ひとり旅出会ひし老女と連れ立ちて互ひに自分語らざるなり

めまひ

常滑 高須 敬

秋行事の検診受けて異状なければどなぜか眩暈は時々おきる
ストレスも睡眠もよく考えて暮すが良しと弟はいふ
七十路は日増しに多忙友等みな歌つて踊り旅樂しむに
店頭にツリー飾りて客を待つ人少くて車行き交ふ
ヘアカットパーマをかけて寒き道急ぎて夫の昼食作らむ
紅葉をめでの事なく日々の過ぐチラシの数は旅さそひをり
セントレア来りて四年暇なれば利用もせむに夫老い店あり
友と来し御園座の席に落付きて片岡仁左衛門うつとりと観る
石井欽は死去せしを今朝の紙上に知る幼くて共に遊びしものを
思い出が次々失せる死去通知日本にバレー広めし人の子

伊豆の海 藤沢 田辺 紀子

温かき伊豆の海辺や鷺群は冬浪よけて岩かげに寄る
艶やかな黒鷺一羽まじりて鷺群のなか華のごとしも

いつの日にまじりしならむ黒鷺もうからのごとく岩間の餌をはむ
うすあかき鈴蘭に似し花かかぐ野性となりしサボテン群落

鋸歯状のアロエの葉つば瑞々し荒磯の岩に朱花たちあがる

研ぎ澄める弦月の下爆音のこし米機ひとつがよぎりてゆけり
みんなみの海をめざして飛ぶ米機 故国のイヴの恋しからむに
極月の庭は微妙に色たがふ赤実かかぐる千両籾の樹

老いぬれば血縁さへもうとましきかホームに入りてより便りなき姉
「ひとりがよい」と常言ひし姉 心開きホームの友に交はりるむか

手紙 犬山 仙田まゆみ

どしゃ降りの雨を蹴立てて郵便の配達は来ぬいつもの時間
友よりの手紙届きし雨の午後郵便受けは世間と繋がる

もの思う夜のこころを不意に打つ雨垂れのごとき秒針の音

携帯の永久にかからぬ番号を未だ消せず三か月過ぐ

いつかふいに繋がる携帯 青空の深く高く澄みゆけばなお

高速路みぎ左みぎと走り抜くテールランプに過去を曳きつつ

ブレーキをかけるも羽根のあるものは飛び立つという選択肢もつ

前を行く車のナンバー傾ぎいて通勤路の緊張ゆるむ

やわらかな朝陽の中に見て見ると香りを開くサンセベリアは

校庭の桜老樹の返り花渡しそこねた手紙のように

芸能大会 飛鳥 中山 路子

打ち鳴るは神楽太鼓のオーブニング館内轟き鼓動騒がす

どの人も童女の如くに踊りたるいきいき民踊老いを忘れて

吾の口も釣られて真似てるあいうえお朗読たのし芸能大会

吾子のため父の植えにし柿の木のためわ実るを孫穫りくれぬ

庭先に白黒茶いろの豆干して国旗立てなば今日新嘗祭

冬日浴び庭の紅葉の色映えて濃きに薄きに己を見する

エプロンともんべの着心地好む吾古きブラウス改良なしおり

道の端の柿鳥とらず緋の色に明かり灯せり師走の空に

ころころと転がして選る豆なればふつくら艶なす揃いの粒ら

ねえねえと吾に寄りたる孫はもう受験生なり口数少なく

ロゼワイン 名古屋 村上喜美子

ロゼワイン充たしてよもやま話する女同志の愚痴交ぜあいて

足弱り其処まで行けぬと伝える傘寿を超えし友の歳月

病む友に見舞いの言葉あれこれと書き替えてみる細き罫紙に

うつらうつら居眠りて覚めししばらくは夕陰をおく時刻に惑う

注連飾り一揃い欲しい宵の町に出づれば茜雲はなやげり

しばらくは存在感のある落葉 道片側を淡く色なす

夫逝き子行き一人を守る家紅椿咲く冬の真ん中

夜を通し灯して眠る戸の外の風の音にもおどろきながら

卓上のサプリメントはさまざまの瓶におさまる明日も生きたし

ほのぼのと柚子の香たてて練りあげる厨の中の冬のたのしみ

本部 通報

〔本部定例歌会案内〕

二月十四日(第二日曜)午後一時より。
会場は名古屋市女性会館(電話〇五二・三
三一・五二八八)にて行います。
多くのご出席をお待ちしてます。

〔本部定例歌会報〕

平成二十二年一月十日(日)
出席者(司会) 佐野美恵 杉本容子
小松本眞智 川島千枝子 内海康嗣
久納千晶 近藤恭年 和田悦子 石井美雄
村井佐枝子 中山哲也 大澤澄子
勝又祐三 林すみ子 松岡孝子 紀水章生
安藤なを子 長谷川径子 水野直美
伊藤京子 鷺沢朱理 鈴木寛子 海野灯星
青木久子 桜井五月 小野寺紀美代
後藤美代子 西川幸子 大塚寅彦
総勢二十九名の出席を得て盛会。

〔豊田支部歌会報〕

平成二十一年十二月四日(金)十二時
豊田産業文化センター内「てふてふ」
講師 斎藤すみ子
出席者 石倉香子 蟹尚行 篠田広美
鈴木充江 那須勝美 西川修 山村博保
他二名

〔蛭川支部歌会報〕

平成二十一年十二月十一日(金)
午後一時半 済美の館
出席者 (司会) 瀧田久枝
不破よね子 桜木喜代江 鈴木芳江
小林聰子 田口千春 村瀬トシエ
永治八重子 田口まち枝 土井佳子
岩畔勝子 梶田久枝

〔東海支部歌会報〕

平成二十一年十二月十八日(金)午前十時
東海市立文化センター
講師 佐野美恵
出席者 (司会) 石井美雄 内海康嗣
滝田恒春 高須孝 宮沢実 山中ちゑ子
他六名

〔有松支部歌会報〕

平成二十二年一月六日(水)午前十時
有松コミセン
講師 大塚寅彦
出席者(司会) 中濱郁雄 青山かほる
鈴木千代子 橋本倫子 内藤一義
柴田今日子
午後より懇親会と永井陽子初期作品講義

〔扶桑支部歌会報〕

平成二十二年一月八日(金)午前十時
柏森中央学習等供用施設
出席者(司会) 和田悦子 鳥居治子

赤尾洋子 太田典子 北村久子 中山哲也
鈴木淑子 間宮佐和子 大澤ひな子
坪内はな

〔各欄推薦・掲載は四月号より〕

石尾百合子 梅村康江 神谷由希
木下容子 久納千晶 鈴木充江 中山哲也
西川幸子 松谷忠和 三浦しき 渡辺信子
準同人へ

池田厚子 大久保久子 加藤友利
北村久子 紀水章生 後藤美代子
滝川松子 寺西征津子 中井虎尾
中畑智江 橋本倫子 日比野和美

〔お知らせ〕

二名の方 編集となります。
佐野美恵 村井佐枝子

〔新支部開設〕

笠松支部
所在地 岐阜県羽島郡笠松町八幡町六一
村井佐枝子方

〔総合誌作品〕

・角川短歌二月号
・斎藤すみ子「高層にて」十二首
・短歌研究二月号
・村井佐枝子「サガン」十首
・大塚寅彦「月光秘儀」三十首(連載最終回)

編 集 後 記

☆出版社、雁書館の主の富士田元彦さんが、昨年十二月十八日に敗血症で逝去された。富士田さんの特徴ある小さな字で書かれた数枚の葉書が、今手元にある。「隻腕隻脚になつてしまつて、雁書館の階段が上れませぬ」「これからは本業のほうで頑張ろうと思ひます」。だからわたしは本業の映画評論を始められたのかと思つていた。

☆前衛短歌運動はかき消え、世の中は確実に変わつている。
(斎藤すみ子)

☆本誌の誕生日、恒例の十首詠競詠です。

☆第二回石川啄木賞（北溟社）の短歌部門受賞者に本会の堀田季何さんが決まりました。青木久子さんも候補に入つてます。発表は「詩歌句」誌。また、「歌壇」誌二月号の歌壇賞では中畑智江さんが候補となり作品掲載されてます。賞がすべてではありませんが、こうした発表の機会を飛躍のきっかけとされることを願います。

☆今年も各欄推薦を発表しました。四月号掲載分の詠草から新しい会員区分にして下さい。また新同人の方は題をお忘れなく。☆寒さがぶり返すようです。ご健詠を。

(寅彦)

選者住所氏名

稲葉 京子 横浜市戸塚区品濃町五一五南の街
二・七〇七(千四四・〇八〇二)
大塚 寅彦 (発行所に同じ)
斎藤すみ子 岡崎市梅園町二・一・B405
(千四四・〇〇三二)
古谷 智子 小金井市中町一・六・二二
(千一八四・〇〇二二)

支部所在地

東 京支部 横浜市戸塚区品濃町五一五南の街 丁七〇七 稲葉京子方
京 滋支部 大津市栄町二二二 小山青笠方
高 山支部 高山市西町一四一 椋井幸子方
豊 橋支部 豊橋市牛川町字川垂一三一 鈴木志津枝方
岐 阜支部 名古屋市長良白妙町二二三 細江仙子方
島 根支部 浜田市田町四町内七四三二三 加藤嘉昭方
中 津支部 中津川市茄子川町一六八八七八八 大塚せつ子方
坂 下支部 中津川市坂下町旭町七三一一二 吉村ふみえ方
白 河支部 白河市関辺字上ノ代九三一一 鈴木 茂方
蛭 川支部 中津川市蛭川一七一一六 梶田久枝方
岩 村支部 恵那市岩村町一五七三一九 岡田登美子方
安 城支部 安城市二本木町長根四七一一五 川浦信之方
東 海支部 東海市名和町寄山二二 佐野美恵方
豊 田支部 豊田市千足町一一一七四 篠田広美方
鳥 取支部 境港市上道町三七一一 足立早苗方
扶 桑支部 丹那郡扶桑町高雄中海道一八二 和田悦子方
志 段支部 名古屋守山区吉原字深沢一七八一八八 竹内美香方
サ イバ 支部 岐阜県羽島郡笠松町八幡町六一 村井佐枝子方
http://www.tanka.org/cyber.html
堀田季何方

編集発行人 大塚寅彦
顧問 稲葉京子
編 集 川田 茂
菊池 裕
斎藤すみ子
佐野美恵
杉本 容子
古谷 智子
村井佐枝子

平成二十二年 一月二十五日 印刷
平成二十二年 二月 一日 発行

〒462-0810 名古屋市中区山田2, 9, 5, 209
発行所 中部短歌会

TEL 052, 917, 3915
FAX 00860, 8, 79534
郵便振替

〒460-0011 名古屋市中区大須1, 7, 26
印刷所 石川特殊特急製本(株)